

HY ♡ HY HY HY ♡ HY HY

広域研究活動支援事業報告書

HY HY HY ♡ HY HY HY HY

HY HY HY ♡ HY HY ☆ HY

HY ♡ HY HY HY HY HY ♡

HY HY HY HY HY HY HY ♡

“書”をホって、“まち”へ出ヨか！

～ 地域を読み解くツールとしての「まち歩き」～

HY ☆ HY HY HY HY HY HY

HY ♡ HY HY HY HY ☆ HY

HY HY HY HY ♡ HY HY HY

HY HY ☆ HY HY ♡ HY ♡

HY HY HY ♡ HY HY HY HY

HY ♡ HY HY HY HY HY HY

東大阪・八尾広域研究会

HY ☆ HY ♡ HY HY HY HY

HY ♡ HY ♡ HY HY ☆ HY ♡

HY	目 次	1
-----------	-----	---

HY	はじめに	3
-----------	------	---

HY	研究の背景	4
-----------	-------	---

㊦ 社会的な背景

- 地域の時代に求められる自治体職員力
- 自治体職員に対する厳しい視線
- 自治体職員のサラリーマン化と市民の顧客化

㊦ なぜ「まち歩き」なのか

- 地域に対する当事者性を獲得するために

㊦ なぜ東大阪市と八尾市の広域研究会なのか

HY	目 的	7
-----------	-----	---

㊦ 地域の魅力の発見・発掘

㊦ 地域を見て地域を読み解くツールとしての「まち歩き」を極める

㊦ 活動の継続と広がりのために

HY	活動内容	8
-----------	------	---

㊦ 東大阪・八尾広域研究会（HY）の「まち歩き」

東大阪・八尾広域研究会まち歩き《東大阪編》

東大阪・八尾広域研究会まち歩き《八尾編》

東大阪・八尾広域研究会まち歩き《ふれあいまつり編》

東大阪・八尾広域研究会まち歩き《市境界編》

㊦ 講演記録 ～あの人の話を聞きたい～

- まちを歩いて再発見を

近畿大学総合社会学部総合社会学科環境系専攻 久 隆浩 教授

- 自分のまちを見つめなおそう、楽しもう ～まち歩きを通じた魅力発見と発信～

ツーリズム/観光プロデューサー・イベントプロデューサー・マーケター 茶谷 幸治 氏

- テクノスケープ ～風景価値の発見と視座の共有・伝播をめざして～

近畿大学理工学部社会環境工学科 岡田 昌彰 准教授

HY 成 果……………52

- 「まち歩き」を通して
- あらためて、“まち”に対する“気づき”とは
- “気づき”の発見感度を高めるための3つの力
- “まち”の魅力の発見・発掘
- 「まち歩き」で感じたものを形にする
- 活動を加速させるポイント
- 活動の輪を広げるために
- 多様な違いを豊かにし、人のつながりのある元気な“まちづくり”へ

HY 参 考 編……………56

- 📌 成功する「まち歩き観光」へのステップ ～ 「まち歩き」の楽しさを伝播させるヒント ～
- 📌 伊丹発。映像を使った「まち歩き」？ワークショップ

HY 「あんなこと、こんなこと」 HY の活動を通して……………69

HY おわりに……………92

- HY の活動への今後の期待 ～ 広角にかつ高所から、“まち”を俯瞰して考えてみる ～

HY 資 料 集

- 規 約
- 東大阪・八尾広域研究会名簿
- HY の主な活動状況一覧
- 各種資料
- 参考文献

HY はじめに

地域の個性が失われつつあると言われています。社会や私たちの価値観を画一化し、効率化する傾向にある動きに対して、一方では、各地方自治体は地域独自の資源、いわゆる地域資源の活用による様々な取り組みで、まちの活性化や特色づくりを行っています。

そのような中、私たちは本当に地域が集積する“まち”を理解してきたのかという疑問を、そして本来、“まち”というものはもっと楽しく、オモシロいものだという可能性を漠然と感じていたメンバーが集まり、その疑問や可能性について実践的に探求することにしました。

そして、この度、東大阪・八尾広域研究会（HY）の活動報告書の作成するにあたり、私たちのこの2年間の活動を何かうまく表現できないものかと思案している中で、寺山修司さんが1960年代に書かれた著書、評論集『書を捨てよ、町へ出よう』に出会い、この本の題名が持つ「頭で考えるばかりでなく、実際に体験を通して学べ!」というメッセージが、私たちの活動を通じて見えてきたものに、ぴったり合ったことから、私たちの活動報告書の表題を東大阪・八尾的に『“書”をホって、“まち”へ出ヨか!』としたものです。

では、東大阪・八尾広域研究会（HY）の現時点における活動の成果を報告します。



HY 研究の背景

📍 社会的な背景

地域の時代に求められる自治体職員力

平成 12 年の地方分権一括法の施行から 10 年が経ち、ここ最近では、地方分権から一歩ふみ込んだ「地域主権」というフレーズがもてはやされています。平成 21 年 11 月には内閣府に地域主権戦略会議が設置されるなど、地方自治体への権限及び財源移譲の流れは加速する現状にあります。地域のことは地域に住む住民が責任を持って決めることで、活気に満ちた地域社会を創っていくことをめざすという、地域主権の理念は、何となく理解できるものの、果たして地域主権の確立が、自治体の行政運営や市民生活にどのように影響を与えるものか、市民はもとより、自治体職員の多くですらよく理解できていないのが現状ではないでしょうか。とはいえ、地域主権の流れの遅速に関わらず、人口減少や経済活動の停滞の中で、自治体間で人口や投資の獲得競争がすでに始まっています。現に、東大阪市も八尾市も、人口は減少が続いており、また地域の主たる産業でもある製造業を支える中小企業の流出という状況が続いています。また、各自治体では、行財政改革を進め自治体としての体力をつけるとともに、地域の特性を活かした施策を打ち出し、自治体のブランド力を強化することが求められています。中央集権の中で、全国一律のパッケージ化された施策を実施するだけで良かったのは既に過去の話であり、現在は、地域特有の資源、社会基盤、地域課題、多様な住民ニーズを総合的に把握し、地域の実情に応じた、柔軟かつ大胆な施策の展開が求められていると言えます。

このような社会背景の中で、自治体職員に求められる能力とは何か。まずは、自らの担当業務を着実に遂行するための事務能力や専門知識を高めることは言うまでもありません。それに加えて、いかに低コストで満足度の高い行政サービスを提供するかというコスト意識を持つことも、当然です。さらには、地域の特性をふまえた政策立案能力もまた、地域主権の潮流の中では不可欠のものとなっています。これらの自治体職員に求められる能力の向上を日々の仕事、職員研修などの機会を通して意識し、多くの職員がスキルアップに努めていると考えます。

自治体職員に対する厳しい視線

自治体職員は、地域主権の時代に求められている能力のさらなるスキルアップに努めている状況にあっても、昨今、世間からは、なお自治体職員に厳しい視線が向けられています。人件費等、所得の官民格差に由来する部分が多いことは容易に推測できますが、そのもう一つの背景として、住民と自治体職員の間にある、“距離感”も影響しているのではないかという試論をここでは提示してみます。

つまり、市民と自治体職員間のコミュニケーション不足というよりも、自治体職員の市民や地域に対する理解不足に問題があるのではないかと、そもそも自治体職員が地域をしっかりと見聞し、地域を理解しようとする意思の不足が“距離感”を作り出し、住民の自治体職員に対する理解不足や誤解、不信感を引き起こしているのではないかと仮説です。

自治体職員のサラリーマン化と市民の顧客化

長期にわたる経済不況のもとで、自治体職員は、安定性が買われ職業としての人気が高まっており、「このまちで働きたい」という地域志向性よりも、「公務員として働きたい」という職業志向性が勝っている状況があります。つまり、地域をしっかりと見聞する意思の低下を表す 1 つのキーワードとして「自治体職員のサラリーマン化」が挙げられます。

また、自治体業務では、複雑化、多様化する住民サービスに対応するため、あるいは頻繁に行われる法律や制度の改正に対応するため、業務の細分化・専門化が進んでおり、自治体職員は、特定のサービスをこなすだけで精一杯という状況があります。さらには、「住民＝顧客」であるという考え方の浸透に伴い、顧客満足度をはじめ様々な指標で成果を求めることに重点を置くあまり、数値管理の対象として画一的に市民や地域を捉える傾向が強くなっています。

このように、“サラリーマン化”してしまっている自治体職員に欠けているものは何か。それは、自らが働いている自治体における当事者性、すなわち「わがまち意識」です。最近では、私たちが所属する東大阪市や八尾市でも職員は、職住分離になっている場合も多く、また、たとえ市内に居住していても、自宅と職場を往復するだけで地域コミュニティとの関係が希薄であることが多いことから、地域を知らない職員が増えています。地域を知らなければ、「わがまち意識」が生まれるはずもなく、その結果、職員は、市民と接していても、仕事と割り切ったドライな関係以上の一步をふみ出せないで終わってしまうことが多くなりかねません。このような中での政策立案は、市民や地域の真の姿が見えないままで行われてしまうことになり、地域課題の実情や市民ニーズと合致しないものになってしまう可能性が非常に高くなってしまいます。

📍 なぜ「まち歩き」なのか

地域に対する当事者性を獲得するために

それでは、地域における当事者性を獲得するにはどのようにすればよいのでしょうか。地域を知らないことには、「わがまち意識」が生まれるはずもなく、地域の真の姿に触れ、知るための気軽に取り組める第一歩として、本研究会では「まち歩き」を提案します。

まずは、「まちを歩き」、地域を「見る力」を養い、次に地域で見たものから地域を「読み解く力」を身につけます。地域を繰り返し歩くことでこれらの力が身につけば、自ずと地域を「活かす力」が身についてくるようになります。地域を机上の空論としたシミュレーションをもって良しとするのではなく、何よりも、多層的で多面的な、実在としての「地域」が集積する“まち”に出会う経験が必要ではないでしょうか。

自治体職員の「サラリーマン化」の要因の1つが、職住分離で地域を知らない職員が増えていることだと仮定すると、「まち歩き」が、地域を見てとる力や地域をオモシロがる力、地域の課題を読み解く力を養う、すなわち、「まち歩き」は自治体職員がその地域を知り、当事者意識を持つ、きっかけとして有効なツールではないかと考えました。

そのため、地域の特性に合った施策を展開する能力が自治体職員に求められている今、改めて「まち歩き」を実施し、その良さを整理しようということになりました。

実際にまちを歩き、様々なものを見て、聞いて、話して、出会って、あるいは食べて、そこから地域を知りましょう。

曰く、『“書”をホって、“まち”へ出ヨか!』です。

📍 なぜ東大阪市と八尾市の広域研究会なのか

そもそも、この研究会は、なぜ東大阪市と八尾市の合同研究という手法をとったのか。

それは、約 10 年前の両市合同のディベート研修を経験した職員の同窓会がきっかけでした。その研修によって生まれた両市の職員間の研修参加者の交流のネットワークを次世代につなげようと、若手職員も交えて開催された同窓会の場で、わがまちに興味を持ち、「まち歩き」を実践する職員が両市にいたことが判明しました。

さらに、地域での住民との活動に深く関わった業務を経験し、「まち歩き」を知ることで地域が好きになり、市民からの信頼を得ることに努め、地域の実情に合った施策を打ち出そうとする職員が存在することがわかりました。また、この職員たちは、地域を知らないことには、地域に対する愛着が湧かず、地域の実情に応じた施策が行えないのではないかとということでした。

そのことから、両市の職員間の交流を深めるツールとして、懇親会だけでなく互いの“まち”を歩く「まち歩き」を実施しようという提案になりました。

東大阪市と八尾市は、中河内という地域の中で類似点もありますが、両市との交流のあった職員は、その中でもお互いの風土の違いや“まち”の様子も何か違うと感じ、その違いをオモシロいと思ってきました。

今まで交流し続けてきた職員同士と、今回の活動を通じて初めて両市を知ろうとする職員たちといった担当業務も世代も様々な人たちで「まち歩き」を行うことで、それぞれの多角的な地域の見方を共有する中で、その地域の新たな発見につながり、お互いの“まち”を比較することで、わが“まち”をもっと知る機会になればという思いから、隣接する東大阪市と八尾市での広域研究を行うこととなりました。



東大阪市キャラクター “トライくん”



八尾河内音頭キャラクター “うぐはち”

HY 目 的

この東大阪・八尾広域研究会での取り組みの目的は、次の通りです。

この研究会では隣接する東大阪市と八尾市の職員が地域の魅力情報を得るためにお互いの市域の「まち歩き」を企画実施します。

📍 地域の魅力の発見・発掘

実際に地域を歩き、地域を見ることを通じて、地域を読み解く力を養います。年齢・担当業務・経験等が違うメンバーと一緒に歩くことで、一人では気づくことが出来なかった地域への色々な見方や視点を知り、地域のいろんな面を気づけるようになることをめざします。

メンバー同士の気づきの共有から地域ごとの特色を読み取るだけでなく、そこに暮らす人たちの多様な営みにも注目します。

また、地理学者オギュスタン・ベルクが「絵画や詞歌などによる教育を通し、単なる環境が“風景”となる」という仮説を提示しています。その地域の歴史的な背景などの解説等（教育）を受けて「まち歩き」をみんなで行うと、地域が価値ある“風景”として参加者に認識されるということがあります。いくつもの「まち歩き」を通じて価値ある“風景”として、地域の特色・地域像を浮かび上がらせるようなモノの見方である視座の獲得について本研究会の活動で研究します。

📍 地域を見て地域を読み解くツールとしての「まち歩き」を極める

「まち歩き」で得られた多様な視点や気づきを共有し、地域像を浮かび上がらせるための整理手法として、「まち歩き」後のふりかえりワークショップを行います。

併せてワークショップにおいて、参加者すべての気づきを引き出す手法や出てきた意見を整理し記録する技術の習得をめざします。

📍 活動の継続と広がりのために

個人での「まち歩き」では得られない、みんなで、集団での「まち歩き」は、ワイワイガヤガヤの楽しさと仲間意識を育むことができ、そのことで活動の継続につながります。みんなで活動する楽しさと得られる達成感、知るオモシロさは活動を推進していく原動力になります。

また、「まち歩き」の活動を広めるため、これから「まち歩き」をする人への事前準備から「まち歩き」の記録方法などの手引き作成や、HP・ブログ・メール・プレゼンテーションソフト・Twitter等の活用についても研究します。

HY 活動内容

ただ散歩や健康ウォーキング的に、地域をさまよいながら歩くことも楽しいですが、テーマや視座を持って、「まち歩き」を行うことは、個々の「まち歩き」参加者の発見や気づきが多くなります。また、「まち歩き」の事前調査時に、地域や“まち”の特色である歴史、地形、成り立ち、今後のまちづくりの方向性等を調べておくと、実際の「まち歩き」時の見所がわかり、限られた時間の中で効果的かつ内容の充実したものにすることが可能です。

では、「まち歩き」を企画する時の手順、「まち歩き」の基本について考えてみます。

①「まち歩き」をする場所とテーマを決定する

まず、どの地域を、どのようなテーマ（切り口）で歩くのかを決める必要があります。「ここが自慢したい!」、「地域に特色がある!」、「地域が元気でオモシロそうである!」など、興味や関心のある地域を選ぶのがポイントです。なお、今回本研究会では、次のようなテーマで＜「新線（JR おおさか東線）により変貌しようとするまち」、「旧植田家住宅&昭和の残り香がある駅前のまち」、「イベントを通じたまち」、「東大阪市・八尾市の境界線を歩く」など＞「まち歩き」を行いました。

また、「まち歩き」を地域のまちづくり活動につなげることを目的にする場合は、地域の現状を把握するとともに、「まち歩き」のテーマや視点から見えた成果を今後の活動にどうつなげていくことができるかを意識することが重要です。

②「まち歩き」のガイド（ツアーコンダクター略して、ツアコン）を決定する

みんなで「まち歩き」を行う場合、やはり道案内も含め、地域を解説できる「まち歩き」のガイド（ツアコン）の役割が重要です。特に、専門家や地域住民の方にガイドしてもらうと新しい知識や生活感あふれる話が聞け、より豊かな「まち歩き」になります。本研究会の「まち歩き」においても実際に観光協会の方や地元で長年お住いの方などに解説を行っていただき、「まち歩き」に深みが生まれました。

③地域についての下調べ及び見所とコースを決定する

実際の「まち歩き」を行うためには、下調べはたいへん重要な作業の一つです。地域に関する情報を集め、分析し、お薦めの場所、街並み、時にグルメなど「まち歩き」の見所を決め、住宅地図等におおまかなコースを設定します。次に、実際に事前調査としてプレ「まち歩き」をしてみましょう。当日と同じ条件を想定し、コースを巡り、集合場所や所要時間、通行の安全、トイレ、雨天時の対応などをチェックする必要があります。

④視座について考えてみる

下調べや事前調査の結果、地域や“まち”の全体像や構成、お薦めポイントや見所、問題点などがわかってきます。それをもとに再度、何に着目してどういう視座で、地域を見ていくのかを絞り込み、実際の「まち歩き」で視座を最も効果的に感じてもらえるかを考えることが重要です。

⑤企画案を作成して、「まち歩き」参加者に周知する

これらをふまえ、テーマや企画の主旨、日時、集合場所、コースの概要、問い合わせ・連絡先などの必要事項を記載するとともに地図や施設のパンフ、見所の解説などを入れておく準備は完了です。

これら「まち歩き」の基本をふまえながら、次に、本研究会の活動において行った「まち歩き」の実践について紹介していきます。

いざっ HY「まち歩き」キックオフ！



東大阪市キャラクター “トライクン”

📍 東大阪・八尾広域研究会（HY）の「まち歩き」

東大阪・八尾広域研究会まち歩き《東大阪編》

【実施日時】

平成 21 年 12 月 12 日（土） 10 : 00～13 : 30

【参加者】

東大阪：大原、森、西村、黒川、朝田、福井、藤田、菊地、宮城、植田、宮田、崩谷

八尾：高谷、森本、吉川、内野、相原、網中

ゲスト：大西（観光協会）、福田、中島（近畿大学理工学部大学院生） 合計 21 人

【まち歩きルート】（別紙参照）

（集合）近鉄弥刀駅⇒金岡商店街⇒大蓮地区（3 商店街）⇒大蓮図書館⇒ノムラドーム 21⇒大阪市・東大阪
市境界⇒衣摺・柏田地区（中小工場集積地）⇒養豚場（長瀬畜産）
⇒星トンボ食産工業所（地ソース）⇒アンファン本社工場（洋菓子）⇒柏田北公園
⇒JRおおさか東線長瀬駅⇒長瀬墓地⇒波牟許曾神社⇒神劔神社⇒近大前商店街（解散）

【参加者のつぶやき】

金岡商店街・大蓮地区 3 商店街

- ・ 車の通らない商店街。
- ・ 焼き鳥おいしかった。
- ・ 焼き鳥のタレおいしかった。
- ・ 安売り店多し。
- ・ まちなかのスナック。
- ・ 商店街が元気！
- ・ 小さい商店街がいっぱいあって、八百屋が競合しているのにいっぱいあって、元気でいいなあと思った。
- ・ 商店街が活気があり、住民の強さも分かりました。小さなアウトレット？（激安店）も多く、おもしろかったです。

大蓮図書館

- ・ 大蓮分室（図書館）の実物が見られてよかった。利用者もたくさんいてよかった。

大阪市・東大阪市境界

- ・ 道を挟んで市域が変わっても極端な差がなかった。八尾と大阪市では差が激しいように思う。
- ・ 大阪市の境界もおもしろい。違いがある所を探せばもっとよい。

中小工場集積地

- ・ このあたりにも工場が集まっているのを知った。
- ・ 渋川が工場のまちって知らなかった。



- ・ これぞ東大阪。まち工場がよく似合う。

養豚場

- ・ 養豚場が衝撃的でした。個人的にはとてもよかった。Good Choice !
- ・ 豚(┌(|)┐)が衝撃☆☆
- ・ 豚小屋のにおいが昔なつかしい感じがして、都市に豚なんて意外！

星トンボソース

- ・ 星トンボソースが想像以上に小規模でやってて驚いた。
- ・ 星トンボソースを味わうのが楽しみ。
- ・ 出会いのオモシロさ。
- ・ ソースがよかった（まだ使っていないけれど…）

柏田北公園

- ・ 公園の遊具がとってもすごいデザインだった。

その他・全体を通して

- ・ 工場、養豚場、住宅など容認するまちのふところの深さがわかりました。
- ・ ソース工場や洋菓子の工場も味があっっておもしろかったです。
- ・ 商店街（大蓮）で買い食い、お菓子もありで、楽しいコースでした。
- ・ 市の境界がマンホールでわかったり、まちなかの養豚場はびっくりでした。

八尾関連

- ・ 「ものづくり」。八尾でもやってる工場もよく見かけた。
- ・ 八尾にも似たところが…。
- ・ 八尾と似ているところがあり興味深かった。
- ・ 工場や道が八尾と似ているけどやはり違う。ゆったりしていた。
- ・ 工場街は八尾の太田新町と同じ雰囲気でした。住宅街のはずれに工場街が広がり、行政の境界につながる「まちの流れ」は一つの法則なのですね。
- ・ 町並みは八尾に似ているところも多くあると感じたが、全体的に作りが大きく、八尾の作りよりスケールが大きい感じがある。

まとめ系、その他などなど

- ・ 街の中に見所がたくさんあり、歩いていて発見がある。
- ・ なんでもない道でもみんなで歩けばおもしろい！
- ・ はじめて弥刀・長瀬地域を歩いたが、色々発見したり学ぶことがあって、よいまち歩きができたと思います。また参加します。
- ・ ディープ東大阪ツアーって感じがしておもしろかった。本当の東大阪の姿が見れたね。

- ・ 車目線でしかなかった長瀬地区。歩き目線では新しい発見がたくさんあって有意義な一日が過ごせてHAPPYでした。
- ・ 車でよく通る道路（中環・藤美東～寿町）の内側がわかってよかったです。
- ・ 地元っちですが、よく知っているのは半径1kmくらいでした。
- ・ 同じ道でも少数でまわったらまた違ったと思う。大勢でブラブラできたのが楽しかった。
- ・ 東大阪を代表するコアなまちよかった。
- ・ 違う町並みが見れて楽しかったです。
- ・ 距離感、ちょうどよかったです。
- ・ 足がだるくなりました。
- ・ ふつうの街の魅力。
- ・ 住宅地図がと～ても役に立った。
- ・ 住宅地図の件、反省しています…。崩谷が力石を持ち上げてるところが、かわいかった。
- ・ 個人的には、コースを選定した後、下見に行けたらよかったと思います。地元の人や通ったことのある人がメンバー内にいらっしゃったから迷わずにすみましたが、そうじゃなければ迷子確定でした。



近鉄弥刀駅、河内最小コンパクトな駅です



さ～、行くで～！みんな、地図持ってる～？



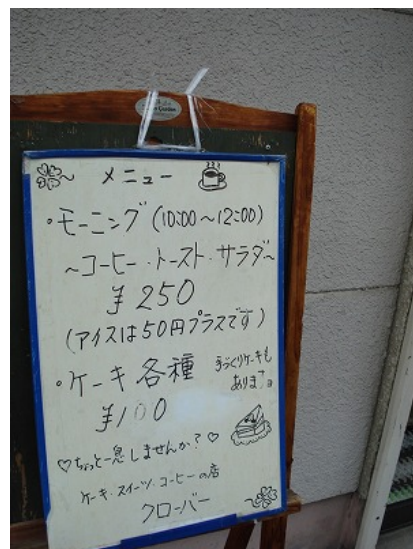
どうせやったら真ん中までくっつけば…。



ここも「かなちゃん」。愛されてるね♪



ど、どんな支援？！



→

お財布支援（笑）？（ケーキ安すぎ！）



有効利用はおてのモノ ♪長瀬川上面利用の賜物



夏の異常気象もなんのその ♪100 円均一商店街？！



あひるの動きがひと目でわかるスグレモノ…
その名は、シャッター☆



薄暗い中、とってもめだってます…



ここ、理髪店やったんですよ（ポストの上にあるの、鏡！）



突如、でっかい木が出現！
→①たたかう②にげる③通り過ぎる→③！



昭和レトロな香りをしのびたいなら…ここです



なんでもホンマニ安い大蓮商店街



いらっしやいませ〜♪



昔よく乗ったなあ… (オレは乗りこなしてたぜ)



君 (も) に ク・ギ・づ・け! ☆



ここ、うまいです。



ゆうゆうタウン



エコを意識されてるんですよ、きっと…。



バリアフリーな商店街（段差なし）



銭湯っぽくないですね、看板ついてなかったら普通のお家みたい。



すごいオシャレな会社ですね～。
デザイン系会社かと思ってたら…正体は意外でした。
正体は↓をクリック！

<http://www.takoyaki.co.jp/company/index.html>



いっただっきま～～あつす！！焼鳥おいしかったね♪



有効利用はおてのモノ ♪大蓮図書館・大蓮出張所
(旧大蓮幼稚園)



図書充実◎



椅子もなんとも言えない味わいがありますね。



有効利用はおてのモノ ♪自動車リサイクル埜村自動車。ノムラドーム 21 って巷では呼ばれているそう。



とにかく、デカイ！ 一回間近で見てみて！ほんま、びっくりするから！



部品が落ちないように二重になってます。



ちょうど大阪市との境界線上をあるいてきました。(大阪市の赤バス)



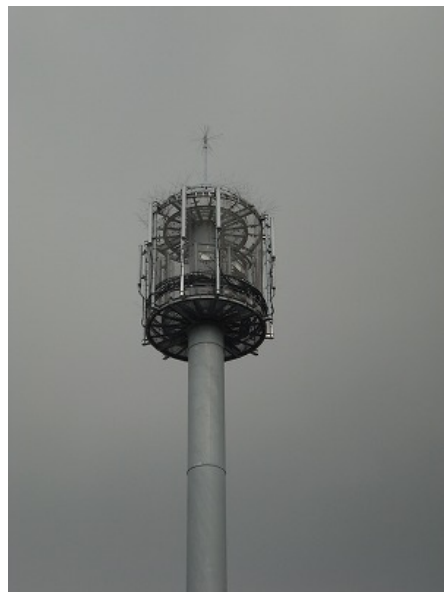
有効利用募集中 ♪ 祝大阪東線開業 (JR 長瀬駅南高架下)



東大阪みっどタウン



衣摺の道風景。これで「みかづき」と読むんですって。



何コレ?!…ひょっとして宇宙と交信するための…?!? (んな、わけないない。ドコモの電波塔でした。)
このどんよりした天気と塔がかなり雰囲気よかったです。なんか降臨してきそうで。(えー?)



街なかでブーブー



ああ、不参加だった方にもあの香りを味わっていただきたい…（遠い目）。せめてブタさんのおしりをご堪能ください。



色んな雑誌に取り上げられてる「星トンボ」。たまたま会社の方が外に出てきてくださり、中も見せていただきました！これぞ「まち歩き」の醍醐味。特に大勢で歩くと「何やってんの？」って地域の方に声をかけていただける確率が高いのがおもしろいですね。ちなみに写真とは違いますが、ミニサイズ（350ml）をみんなお買い上げ。まいどあり～（笑）♪



地図は大事です（ウンウン！）



ピカピカ☆の駅です

**まち
歩き**



ミニシュークリームがおいしい「アンファン」。ちょうどこのころ空腹と疲れがピークに…
(でもシューで復活♪)



どうやって遊ぶんやろ、これ？（柏田北公園） 波牟許曾（ハムコソ）神社近くの公園のかめさん



上も向いて歩こ〜う〜

たぶん 100kg ほどあります。持てない、くそう。



ココが開いてる風景を見てみたかったです。昔はご飯屋さんでした。最後のゴールはお好み焼き屋「てらまえ」。「道頓堀」とか「海遊館」なんてユニークな名前の商品があります。それにしても近大前もずいぶん変わりましたね。写真は森次長のカメラで連写中の西村さん。いい写真とれましたか？^^
みなさまおつかれさまでした！

★彡 HY「まち歩き」のヒントの素！

みんなで考えるための方法：KJ法

「まち歩き」をみんなで企画する時や「まち歩き」後に参加者たちが意見や感想を出し合う、ふりかえりなどに、参加者みんなが意見を出す機会を保証し、さまざまな意見をまとめて視覚的に成果としてとりまとめる方法として KJ 法がよく用いられます。

<KJ 法の特徴・メリット>

- ・付せん（カード）に自分の意見を書くので、どんな小さなことでも遠慮せず書くことができ、参加者みんなに意見を出す機会があります。
- ・付せん（カード）を使って、みんなで並べ替えるなどの共同作業を行うことにより、参加者の一体感が生まれ、うち解けやすい場を作ることができます。
- ・多くの意見をまとめる過程が、付せん（カード）を模造紙やホワイトボード等に張り出すことにより、視覚的に確認でき、参加者みんなが考え方や場の流れを共有できるとともに、みんなの意見等が形のある記録として残ります。
- ・KJ 法は、数名から 10 名程度で行うことが適切であり、それ以上の参加者がある場合は、複数の班に分けて実施し、各班の成果を発表し、多様な意見や考えを共有します。

<用意するもの>

付せん（参加者数×10 枚程度）、マジックペン、模造紙

<KJ 法の進め方>

- ① 意見や感想を出し合うテーマと KJ 法の手順と時間配分の確認を行うとともに、とりまとめ役（ファシリテーター）と時計係（タイムキーパー）を決定する。
- ② 参加者すべてがテーマについて思いつくことをなんでも付せんに書き、ぼんやりした内容でも言葉にするよう努める。ただ、付せん 1 枚につき、必ず 1 つの事柄を書き（2 つ以上のことは 1 枚に書かない）、決めた時間内になるべくたくさんの付せんを作成する。
- ③ 各自の作成した付せんを模造紙に広げ、付せんの内容で近いと思う内容のものを集めて付せんのグループ（島）を作る。また、その際に孤立した事柄が書かれた付せんも無理にグループ（島）にいれる必要はない。
- ④ それぞれのグループ（島）をマジックペンで囲み、そのまわりに 1 つずつ名前やタイトルをつけてみる。また、グループ（島）同士の関係に気が付いたら、複数のグループ（島）にまとめて囲み、名前をつけたり、矢印などで結んでみてもよい。
- ⑤ 最後に、模造紙に大きなタイトルをつけて完成させる。また、複数の班で作業を行った場合は、模造紙を掲げながら、まとめあげた過程を含めて発表し、それぞれ質問や意見を話して共有しましょう。

【「地域コミュニティづくりのすすめ」制作・発行 愛媛大学地域創成研究センター＋松山市より】

東大阪・八尾広域研究会まち歩き《八尾編》

【実施日時】

平成 22 年 2 月 20 日（土） 9:00 ～ 12:30

【参加者】

東大阪：大原、森、福井、菊地、宮城、植田、崩谷

八 尾：高谷、森本、吉川、内野、相原、網中、奥、深江、丸山、壺田、仲谷、牧野、中西

ゲスト：水野（武庫川女子大学）、正野（近大生） 合計 22 人

【まち歩きルート】（別紙参照）

（集合）J R 八尾駅⇒大クスノキ、桃林堂⇒安中新田会所跡 旧植田家住宅⇒渋川神社⇒植松観音堂⇒（法
覚寺）⇒制札場跡（スナック幸前）⇒奈良街道：伝統民家多し（称念寺）（松林寺）簷葡舎（えんぼしゃ）
跡・幕末の私塾（伝往寺）⇒水路のあるまち並み⇒龍華コミュニティーセンター⇒商店街：塀のペイン
ト画⇒駅前通り商店街⇒植田家にて（振り返り）⇒J R 八尾駅（解散）

【参加者のぶやき】

大クスノキ

- ・ クスノキの大木が、ど迫力！！

商店街

- ・ 寸法直しの店がやたらに多いのはなぜ？
- ・ 商店街さみしくなりましたね。
- ・ 小さな商店が多い。

安中新田会所跡 旧植田家住宅

- ・ 旧植田家住宅が整備され以前と比較して建物の広さを明確に実感できました 新旧をつなぐ情報発信基
地になる施設だなと感じました。
- ・ 植田家の見せ方、運営 見習うところがいっぱいあった。
- ・ 植田家に親しみやすさを感じました 生活観が残っているから。
- ・ 新田の大きさにオドロキました 新旧のまちなみがうまく調和すれば良いなと思いました。

J R 八尾駅

- ・ JR 八尾駅の駅舎、瓦がレトロでした。
- ・ JR 八尾駅舎、山陰に来たかと思った。
- ・ 駅前駐輪屋需要ありすぎ。
- ・ 駅前がレトロ 駅もレトロで素敵。
- ・ JR 八尾の北と南の行き来がしにくいのは何でだろ。

まちなみ・まちの雰囲気

- ・ 生活感が感じられる もりだくさん。
- ・ 初めて来たけど懐かしい住宅街 新旧いろいろ。
- ・ 昭和の香り…S40 年代くらい？
- ・ 古くさく、人情味がある。
- ・ 昔から変わらない町並 これからも続きそう。
- ・ ノスタルジック 新旧 洋と和 時代の重なり。
- ・ 建物の高さとか人のスケール のような気がしました。
- ・ 時代が重なって混在している。(近世・近代・昭和)
- ・ 迷路 ちょっと異世界。
- ・ 先の見通せない道が歩いていて興味をそそられる。
- ・ 町並みが同じで共感できた。
- ・ 新旧の住宅がほどよく混じっている。
- ・ 道が細いこともあり車よりも歩いている人や自転車に乗っている人が多くて、昔ながらの風景の良さを引き出していると思いました。
- ・ まちの中心がわかった！神社、寺、庄屋。
- ・ うねうねとした道、水路跡、畑、まちの中に土がある。
- ・ 曲がりくねった道が…
- ・ 大きな屋敷が数多く残るまち。
- ・ お花をきれいにかざっている家がいくつもあった。
- ・ 古く大きなお屋敷がたくさんあった。
- ・ 水路がニョロニョロ走っているのがいい。
- ・ 三叉路、五叉路の多いまちでした。
- ・ 鮮やかな色がいっぱい スナックの看板、お花、掲示板、トタンの青い色。
- ・ 水路横の花 住んでいる人の心がきつときれいなんでしょうねえ。
- ・ 広い道路に出ると車の音が気になった。
- ・ 植松の町並みも改めて歩いてみて古い家屋が多く残っていると感じました。
- ・ 植松の水路改修を一部分しか知らなかったので全体を見て景観を再発見できた。
- ・ 昔ながらの家がいっぱい残されていたことが驚きでした。 東大阪にはないよう～
- ・ 碁盤の目ではない道が良かった。
- ・ 黒い焼板の塀がよい。

その他・全体を通して

- ・ 歴史の中に新発見がありました。
- ・ すごくおもしろくて、友達にも伝えたい。
- ・ 八尾も場所によっていろいろ味があるな～と思いました。 これをどう発信していくか？
- ・ 住んでいる人たち、これから住む人たちがもっと八尾のまちの良さを知れば、新しい住宅にも工夫が生まれるのではないかな。

- ・ 不思議な面白さがあった。
- ・ 今日は瓦がヒットでした。
- ・ まちを歩いて新たな発見がある。道を車で通るだけではなかなか見えないものがある。
- ・ 近すぎて知らない。聞いているよりも歩いてみよう。
- ・ あらためて新発見。また来ようと思う。
- ・ 知らないまちのまち歩きはおもしろい。



昭和のロマンを感じるレトロな駅舎



HYガールズ



万国旗が昭和の雰囲気です



レトロな駅舎前で記念写真をパチリ☆



桃林堂



河川神社の大きなクスノキ



研ぎ屋さんがありました



ヒノキ香る八尾植田邸



渋川神社



ここは映画村？



制札場跡には市の広報板が



あ〜やこ〜や言いながら、



素敵な見越しの松 & 樋



幕末の八尾を代表する私塾：簷葡舎（えんほしゃ）碑



玄関先に奇麗な花



花がいっぱいのまちでした。



タチバナの家紋



じいちゃん・ばあちゃんのパラダイスな児童公園



水路と古い家並み



壁一面の草花、暮らしにアートって素敵



昔の川の堤防の名残（先日取り壊されてました）



ふりかえりタ〜イム（とても重要です）

★彡 HY「まち歩き」のヒントの素！

東大阪市と八尾市を「“まち”の玄関はどこ？」から考えてみる

大阪や東京のような大都市は別として、ある程度の人口規模がある市には、まちの玄関となる「代表駅」があります。鉄道時刻表の路線図には、代表駅が◎で示されていて、八尾市の場合は、近鉄八尾駅になります。市役所の最寄り駅で、バスが頻繁に発着し、商業施設もあり、まさに八尾市の玄関です。

一方、東大阪市は、鉄道時刻表では布施駅が代表駅となっています。確かに乗降客数も多く、近鉄の2大路線の分岐駅であり、知名度も高いです。しかし、合併後の東大阪市役所は、かつては若江岩田駅、現在は荒本駅が最寄り駅であり、布施からは、かなり離れています。そして東大阪市の代表駅である布施駅は、大阪市との境界に近いことから利用者には大阪市民も多いのが現状です。そして、荒本周辺は、道路交通の面では、南北の幹線（近畿道・中央環状線）と、東西の幹線（阪神高速東大阪線・中央大通）の交差点として、地の利がありますが、鉄道における中心性は非常に弱いです。

これには、市の成り立ちの歴史も関係していると考えられ、鉄道網が発達する前の、明治期の地形図を広げてみるとよく分かります。東大阪地域には小さな農村が点在するだけで、どこにも核となる「町」がなく、小さな農村に過ぎなかった布施境界が「町」になっていくのは、概ね近鉄線が開通した大正時代以降です。

一方で八尾市には、古くから八尾と久宝寺という二つの寺内町を核とした商業地が成立していました。大阪府の出先機関である府民センターは、明治・大正期に存在した「郡役所」の所在地に置かれており、当時の政治経済の中心がどこにあったかが窺えます。例えば、北河内郡は枚方、南河内郡は富田林、泉北郡は堺、泉南郡は岸和田となっており、中河内郡の場合は八尾です。

歴史的な中心性を有していたという経緯もあり、昭和23年に八尾町、龍華町、久宝寺村、西郡村、大正村が合併して八尾市が発足しました。そして、東大阪市は、昭和42年に3市合併で誕生しましたが、自治体名も市役所の所在地も昨今の市町村合併に見られるようなものとなっています。

これらの歴史的な経緯などが、少なからず、現在の東大阪と八尾の地域アイデンティティにも影響しているようにも思われます。

東大阪・八尾広域研究会まち歩き《ふれあいまつり編》

【実施日時】

平成 22 年 5 月 9 日（日） 9：30～16：00

【参加者】

東大阪：大西、菊地、宮城、樽井、植田、宮田、藤田、崩谷

八 尾：網中、森本、相原、高谷、溝端、深江、内野、森井、北村、植田

ゲスト：福田（近畿大学理工学部大学院生）、勝亦（奈良県職員） 合計 20 人

【まち歩きルート】（別紙参照）

（集合）近鉄東花園駅⇒寝屋川流域治水施設（松原南調整池）

⇒ふれあいまつり・花園会場⇒近鉄八戸ノ里駅⇒ふれあいまつり・ふれあい通り会場

⇒青少年女性センター（解散）

【参加者のつぶやき】

寝屋川流域治水施設（松原南調整池）

- ・ 寝屋川の総合治水については、今日初めて知り衝撃を受けました。説明を聞き、まずは自分が身近でできることから始めていきたいと思いました。
- ・ 寝屋川流域を把握できてよかった。

ふれあいまつり

- ・ たくさんの方が各々の出番や役割を担っている市民（積極）参加型のまつりの印象です。
- ・ ふれあい祭りは各種団体が参加していて、みんながまつりをしているというのがよかった。
- ・ 実行委員会形式（行政があまりかんでない）のふれあいまつりなんで、警察の人の姿が少なかった。
- ・ 市民中心で行っているイベントであれだけ大規模にできてすごい。
- ・ 地元に愛され、一体感があるマツリでした。
- ・ たくさんのお親子連れに出会い、市民に定着した「まつり」と思いました。
- ・ あれほどの店舗数と集客があるイベントって実はすごいと思います。
- ・ すごく活気があった！
- ・ こんなにたくさんの方が来て盛り上がってるとは知らなかった。
- ・ 規模の大きさにびっくりしました。私は 30 年東大阪に住んでいますが、ふれあい祭りの模様を初めて知りました。
- ・ 市民の方が楽しんでいるのがとっても良かった。
- ・ みんな楽しそうだった。
- ・ 祭りに来られている方もなんとなくぶらりまち歩きを楽しんでいるという感じがした。
- ・ 年々、東花園が充実してきている感じがした。
- ・ 休憩できる場所が少ない。
- ・ 花園中央公園はイベントができるいいスペースになっている。

- ・ 会場が2箇所に分かれているのがおもしろいと思う。
- ・ 歩行者天国、長かった。
- ・ 歩行者天国の距離が長い。
- ・ 車椅子の人がかなり来ていて、歩行者天国なので来やすいんやろうなーと思った。
- ・ ラグビー場に人がすごく多かった！（高校ラグビーの時くらい？それ以上？）
- ・ 複数個所での同時に行われているのがスゴかった。
- ・ 会場（東花園～布施）と広域のまつりってすごい！！
- ・ 車の通行を止めてのお祭りは八尾ではもうないので、みんなが安心して楽しめているのでよかった。
- ・ 規模が大きい。人がたくさん、にぎわいがあった。
- ・ やっぱり人が多かった。
- ・ GW中全国で一番人を集めるとの「博多どんたく」に行ったが、規模は違えどにぎわいは負けていない。
- ・ 「景観」より「人」を見た。
- ・ 「市民がやっている」と、もっともっとPRしたらどうか？
- ・ 市民が作っているまつりだから本部も殺伐としていなかった。
- ・ いいお天気だったので人も多く、少し疲れました。
- ・ GW明けのタイミングがよい。夏の祭りは大変です。
- ・ 今日は天気がよく良かった。（少し疲れた）
- ・ 5月開催というのが、時期も良いと思った。
- ・ ごみを清掃している人が、いる一方で、道にごみを山のように捨ててる人が…。
- ・ これだけの人が集まってる割にはキレイでおだやかな感じがしました。
- ・ 今回ふれあいまつりをはじめて知って参加しました。
- ・ 前夜の花火を今度は見てみたいです。
- ・ 8日の花火も良かったです。
- ・ 子どもが喜びそうだと思います。
- ・ ふれあいまつりは地元として誇らしい。
- ・ 初めて東大阪市の祭りに参加し、まず人数が大変多くて驚きました。そこから東大阪のパワーを感じました。
- ・ この祭りを大いに参考にし、八尾市の河内音頭祭りも盛り上げたいと思いました。
- ・ 来年もまた行きたいと思いました。
- ・ 来年もまた来たいと思うイベントでした。

カレーパン

- ・ カレーパンの店、けっこう盛況だった！
- ・ カレーパン事業の成功を心から願っています。
- ・ カレーパン結構な人気だった。
- ・ カレーパンのまちおこしがおもしろいと思った。
- ・ カレーパン（+キャラクター）おいしかった。
- ・ カレーパンはブランド力として高めていける可能性がある。

- ・ いろんな種類があるのがいい

出店関係

- ・ 出ているお店、バラエティが豊富だった。
- ・ 出店数が想像以上に多かった。
- ・ 安い！
- ・ 物産展(県産店)や外国の方もお店を出しているのが良いと思う。
- ・ 全国各地の物産があって買い物天国だった。
- ・ 他のお祭りに比べて、お店で売られている物の価格が安いように思い、お得感がありました。
- ・ バザーが楽しかったです。
- ・ 出店東大阪のブースをかためたほうがよいのでは？
- ・ 色々有名などもでてるし、布団太鼓などもあって、一日で東大阪のいいところを見れた。
- ・ 「稼ぐ」ことを目的にしたらもっと売れるのでは？でも安いことが魅力。

市民、地域性

- ・ 自主性の高さが自治を育むことが実感できた。
- ・ 駐輪場に整備のための人がいないことから自治の高さが伺えた。
- ・ 頼もしい！防犯委員の方のパトロールを見て、地域力(自治力)が高いと思いました！

クレーム対応？

- ・ 河内のお父さんはやっぱりイラチ（≡せつかつ）やなあと思った。
- ・ クレームはすぐ生まれるものだと分かった。事前に防げるのでは？
- ・ クレームは、本人が、どうしたらいいのかわからない不安から生じる。
⇒本人のクレームも含めた話をきちんと聞く。そして「ほんまでっか？！」とまず驚くべし。共感すると相手は安心する。

その他・全般

- ・ 市役所の方々のネットワークの広さを知れた。
- ・ 毎回隣の市のことでありながら新しい発見があり、楽しんでいます。
- ・ 一日を振り返り、自分にとって良い経験ができたと思います。これからも機会があれば積極的に参加したいです。
- ・ こうしてイベントに参加してみるのもアリだと思った。
- ・ こういう祭りの散策では「集合→自由行動→集合→自由行動」の流れが良かったと思う。
- ・ 若者の勉強会の参考としたい。
- ・ まちを歩くことによって魅力を再発見できる。これを歩いていない人にも伝えることができるようになれば自分の住んでいるまちをもっと好きになってもらえるのでは。
- ・ まち歩きは継続していこう。
「両市のにぎわい」が目標なので、新しい視座をどんどん見つけていこう。



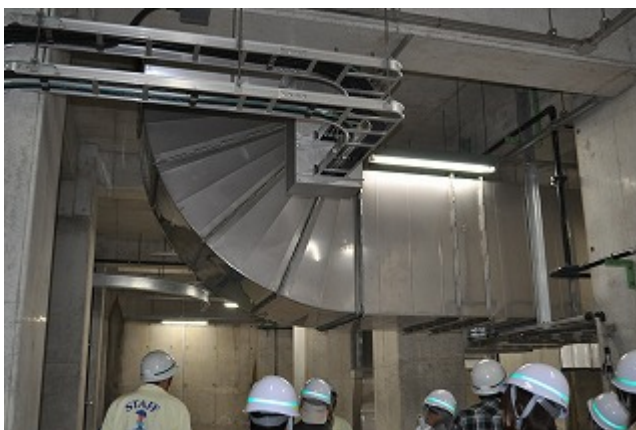
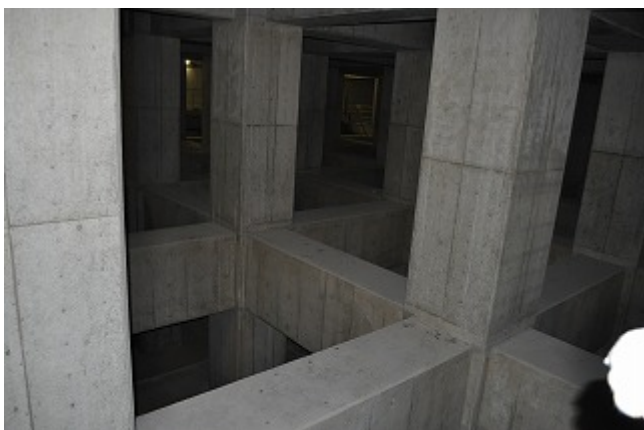
ふれあい祭り（花園中央公園会場）



☆ ラグビーワールドカップ花園誘致署名活動 ☆



貯留施設(松原南調整地)見学会。みんなでお勉強中！



地下には謎の構造物。まるで秘密基地。



ふれあい通り会場（八戸ノ里～布施）へ移動中。駅にはラグビーボール！



ふれあい通り会場



東大阪新名物 : カレーパンの即売 (完売御礼☆)



HY のふりかえり会

★彡HY「まち歩き」のヒントの素！

「まち歩き」をより一層楽しむために

「まち歩き」は、一人ではなく大勢で取り組んだからこそ得られる効果があると本編のほうで述べてきました。より多くの方に参加してもらうこと、そして活動を継続していくことが重要であるという認識のもと本研究会（HY）では、以下のことを意識しながら活動を展開していました。

＜楽しい要素を盛り込むこと＞

参加動機を聞いてみると、「楽しい」、「おもしろい」ということが、きっかけに活動に加わったという人が多くいました。参加すると楽しい話、ためになる話が聞けるとか、終わると一杯飲める？ など、動機は何でもオッケイ！参加者によって楽しむポイントはさまざまなので、偏りのない多様なメニューを用意するように心掛けました。

- ・ 「まち歩き」の道中、休憩がてらに買い食い（定番の地コロッケやスイーツ含む）スポットを探しておく
- ・ 「まち歩き」終了後には、地元の店で打ち上げをする
- ・ そこでしか買えないおみやげ店（アンテナショップなど）に立ち寄る
- ・ 普段聞けないような話（歴史的建造物の解説など）を聞かせてもらえるよう事前に関係者と調整しておく

＜一歩踏み出しやすい“仕掛け”をつくる＞

まずは、「参加してみてもいいかな」と思ってもらえるかがポイントかと考えていました。

- ・ チラシなどのデザインにこだわってみる（デザイン性に心惹かれる）
- ・ イベントの特殊性を打ち出してみる（「何それ！おもしろそう！！」という意外性）
- ・ 地道な勧誘活動（あの人がメンバーにいるなら、あの人が一緒ならと参加する場合あり）
- ・ 「まち歩き」の最中は参加者が一人にならないように気を配る（常連メンバーばかりで固まらない。はじめて参加する人には、ときどき声をかけてみるなどの働きかけを行う）
- ・ 「まち歩き」終了後には、ふりかえりの時間を設けて、意見を述べる機会をつくる。（多様性の理解を原点にもって、ハナシをしている人の意見に耳をしっかりと傾けるルールを守る）

＜先進地視察やイベントの活用＞

今回の本研究会の活動では、他所で「まち歩き」関連のイベントがあれば参加してみることにしました。幸いなことにこのようなイベントは、交流会がセットなものも少なくありません。これらをうまく活用して、新たな人的なネットワークの構築をはじめ、企画運営の仕方、成功の事例や失敗談など、各担当された方のハナシを直接聞くことは、とてもためになりました。

東大阪・八尾広域研究会まち歩き《市境界編》

【実施日時】

平成 22 年 11 月 21 日（日） 9:30～13:30

【参加者】

東大阪：菊地、大原、宮城、中山、植田、朝田

八 尾：網中、森本、吉川、相原、壺田、内野

ゲスト：福田、中島、阪口、亀岡（近畿大学理工学部）

合計 16 人

【まち歩きルート】（別紙参照）

（集合）近鉄河内山本駅／瓢箪山駅⇒心合寺山古墳⇒しおんじやま古墳学習館⇒楽音寺地区⇒箕後川（市境）⇒みどり清朋高校⇒恩智川治水緑地（池島・福万寺地区）⇒第二寝屋川（市境）⇒玉串川⇒高砂住宅（解散）



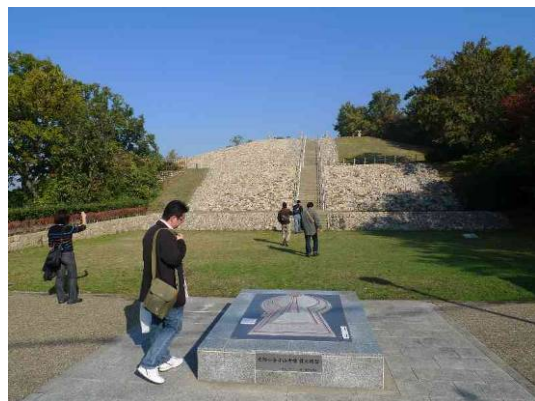
普段は乗らない路線バス、いい旅夢気分？



ここも大阪。



思えば遠くへ来たもんだあ。



心合寺山古墳、とっても立派でした。



古墳の木、桐の木、良い木ですよ。



レプリカな埴輪、「はに丸」と「ひんべえ」も欲しいところ。



登頂記念にハイ、チーズ！！（古っ）



ハワイアンにダンシングな埴輪たち



市境界・・・今では自由に行き来できますが・・・。



ロケット発射台。まいど1号もここから旅立ちました？



市境の川（というより、溝やね）を歩く。



作戦会議中。



秘密基地、発見。



カントリ〜ロ〜ド この道い ずっとおゆけばあ〜♪



何の屋敷！？八尾市清協公社です。



色づき始めた銀杏並木。



ハイっ、わかりました！



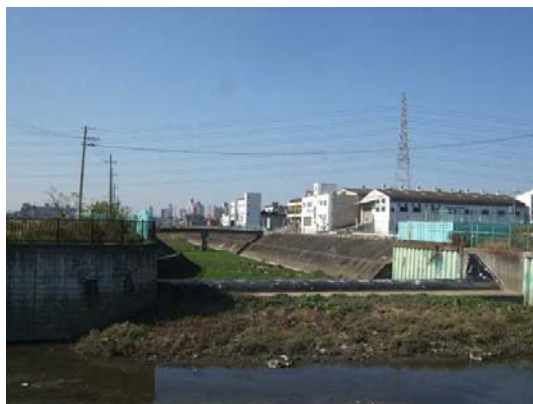
明日にかける橋。ここは穴場です。



水と緑がゆったりな治水緑地。



弥生人に捧げるアートな彫刻。



第二寝屋川最上流、珍しいエアバック式可動堰で恩智川と縁が切れてます。



市境界をなす第二寝屋川。「第二」ってそんな、安直な名前でええんか！？



菊のハウス栽培、玉菊（玉串福万寺地区）



玉串川は滝となり、第二寝屋川に合流。
春には桜の花びらも流れ落ちるも、いとをかし。



←再び八尾へ



その白いお姿は？団地のシンボル、
給水塔です。くびれがセクシー☆



商店街？に遭遇、賑わってました。



メンバーの庭先をお借りしての打ち上げ！



まちも歩くが、ギターも弾くぜ！



まいど1号が縁で茨城へ嫁ぐメンバーのお祝い会でもありました。

📍 講演記録～あの人の話を聞きたい～

本研究会の活動を通して、自分たちで「まち歩き」を行う中で、「他所（よそ）では、どのようにまちを歩き、まちについてどのような見方や考え方をしているのだろうか。」という疑問を持つようになりました。よって、本研究会では、「あの人の話が聞きたい！」ということで、各分野で活躍され、自らもフィールドに入り活動を展開されている方々からお話を聞くこととしたものです。

今回の3つのお話のうち岡田先生の講座（HY 主催）以外は、東大阪市のまちづくり支援課が企画への参加という形で実施されたものであり、それぞれのお話は、本研究会の活動を進めるにあたって参考となる内容でした。また、3つのお話の共通点として、改めて自分たちのまちを見直すことで、見えてくるものがあるということが、浮かび上がる貴重なものでした。

久先生の「まちを歩いて再発見を」では、まちの構造やまちの歴史、地名や地形から読み取れる地域の情報について仲間でもちを歩く意味について解説いただきました。

茶谷さんの「自分のまちを見つめなおそう、楽しもう～まち歩きを通じた魅力発見と発信～」では、まちには近寄ってみることで見えてくる魅力があり、そのように見ることの出来るツールとして「まち歩き」があるということ。「まち歩き」を通じて、まちを知ることが、まちが好きになり、まちを自慢しなくなるというステップにつながるので、まずは、まちを知ることが大切であることを学びました。

岡田先生の「テクノスケープ～風景価値の発見と視座の共有・伝播をめざして～」では、テクノスケープ（工場景観）を題材に、地域には埋もれている風景価値がたくさんあるということ、その価値をいかに発掘し、磨きをかけることが大切であるかということを知りました。

それでは、次に、それぞれの講演記録の概要について紹介します。



八尾市下水道のマスコットキャラクター “ヤッタくん”



東大阪市キャラクター “トライくん”

◎ 地域活性とは

コミュニティづくり、支えあいのしくみづくり

まずは、生活のイメージを明確にしたい・・・

どんな暮らしがしたいのか？、将来の暮らしに必要なことは？

⇒ 暮らしのあり方を地域の人々で話し合い、

それを実現する為の仕組みづくりや施設づくりを考える

生活のマスタープランづくり 生活の仕方が違うところの調整を考える

◎ まちの構造を読みとる

まちを構成しているもの

自然軸（木々）・空間軸（道路、建物）・生活軸、歴史軸（昔の地図や写真）

まちの歴史を知る

近代のまち・村のようす 明治 20 年前後の地形図

（江戸期から集落のサイズは変わっていない）

戦前の住宅開発 昭和初期の地形図

昭和 30 年代以降・高度経済成長期

地形図や住宅地図の経年変化から開発の様子がわかる

まちの構造

神社、お寺、集会所、広場、庄屋さんの家 ⇒ 村の中心

お地蔵さん ⇒ 村のはずれ

城下町のお寺 ⇒ まちのはずれ（お寺は軍事基地）

街道 ⇒ 山と平地の際に走っている

地名には環境の情報が隠されている

弥刀 → ミト → 水戸 → 水の入りの口／ミナ・ト

近江堂 ← オオミト

東大阪には水に関係する地名が多い 水走、若江、長瀬、菱江・・・

大和 ← ヤマト(山戸・山門)

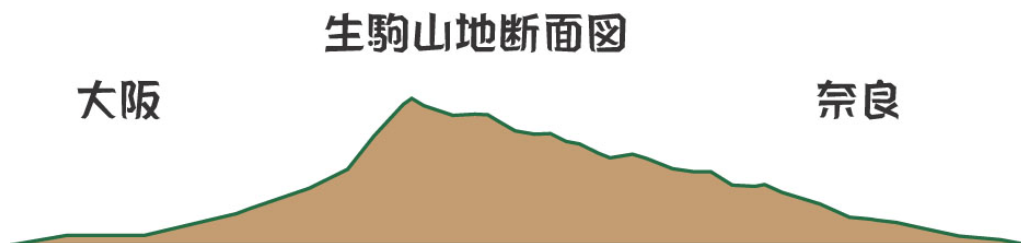
クボ → 窪んだところ

ナラ → ならす～平らなところ

◎ 地形を読み解く

生駒山

東から来た断層が西側の断層に乗り上げたところなので、大阪側は急で奈良側が緩やかな地形になっている。



上町台地

もとは大阪湾と河内湾に挟まれた半島状であったと考えられるが、東部の河内湾が大和川からの土砂により、河内湖・湿地帯を経て沖積平野となった。

江戸後期作の浪花百景でも、西側が高台となっている様子と対照的に東側には田畑がひろがる様子が描かれている。

上町台地の西側に広がる展望

生玉絵馬堂



高津宮



新清水紅葉坂瀧



真言坂



◎ 「まち歩き」の意味

まちを歩くと再発見がある、まちに起こっている変化に気付く。

大勢でまわるといろいろな視点に気付かされる。

人が興味を持って見ているものが面白い、一緒に歩く人には物知りもいたほうがいい。

◎ 地域の資源を活かす

あるもの探しをしましょう！（⇔ないものねだりをしてもしようがない）

地元にあるものの情報が伝えられていない。

地元の人たちこそが地元の資源を大切にしたい。

アイデア・知恵でつないでいく力、わかりやすいキャッチフレーズ

例：登米（とよま）、宮城県登米（とめ）市、明治維新後の少しの間水沢県庁所在地

⇒ 「宮城の明治村」

物語を勝手に作ってしまう

例：由来をそれらしく創作した、瀧谷不動のつつみ餅

自分のまちを見つめなおそう、楽しもう ～まち歩きを通じた魅力発見と発信～

ツーリズム/観光プロデューサー・イベントプロデューサー・ marketer 茶谷 幸治 氏

◎まちをよく見よう

まちをよく見てみると、そこに存在した人間の生き様が積み重なっているのがわかります。

まちは壮大な人間ドラマ、面白くないわけがない。

◎まちの魅力はまちにある

もっと近寄って（ズーム・イン）、見て歩いて、思う。

◎まちを思う

なぜ東大阪市に帝国シネマが出来たのかに思いをめぐらせてみる。

地名の由来、そこでの歴史を考えてみる。

◎だからまちを歩こう＝よく見よう

- 1（見て知ると）おもしろい
- 2（よく見ると）好きになる
- 3（好きになると）自慢したくなる

◎なぜ、自らが住んでいる地域・まちを好きにならないのか？

まちを好きにならないのは、まちを見足らないからだ！！

今の私たちの生活は、周りを見ることができていない。「手応えの無い・空虚な生活」

◎まちの楽しみ方

まずは自分で自分のまちを楽しもう。

次は人と一緒に楽しむ ⇒ いっしょにもう一度行こう！

◎新しい観光のあり方

今までは、お客さんが見る・食べる・遊ぶまち

これからは、地元の人といっしょに見る・食べる・遊ぶまちをつくっていこう。

『共有する観光』

まずは、自分たちが楽しむことから始めよう。

自分たちのまちで暮らしている人々の様子をよく知る。

↓

よく知れば、暮らしぶりが好きになる。

↓

好きになった自分たちのまちをよく知ってもらいたい、好きになってもらいたくなる。

そのための手法として・・

一緒にまちを歩いて、まちのよさや楽しさを知ってもらおう！



名所旧跡を観光して、そのまちを好きになることは、ない。グラバー園や平和公園を訪ねて長崎を好きになったという話はあまり聞かない。東京タワーに昇ったから東京を好きになるということもなければ、自由の女神に行ってニューヨークを好きになることも、まず、ない。まちを好きになるのは、そのまちのたたずまいとそこに住む人間が好きになるからだ。だから、長崎の市民は「長崎さるく博」でわがまちのたたずまいに触れ、知らなかった人々と話を交わして、まちを好きになった。（「まち歩きが観光を変える」より）

(はじめに)

- ・ 風景の価値やまちの宝は、誰かが発見してそれをみんなの中で共有できれば、まちのなかに新しい景観、あるいはものの価値が増える。見方を変えるとすることでそれができるのではないか。
- ・ 自分は茨城県日立市の工場群の中に育ったので、まちに対して独特の見方をもっている。記号や番号、都市に座標ができる。巨大な定規をまちに置く。
- ・ 工場をつくる人は、おもしろいものをつくろうとしてつくっているのではない。しかしその風景をおもしろいと感じている人はいるはず。そこで出てくるキーワードが「視座」。

(視座について)

- ・ 視座について、地理学者であるオギュスタン・ベルクが興味深い仮説を提示している。「絵画や詞歌などによる「教育」を通し、単なる環境が“風景”となる」と。
- ・ なんてことない風景は、景観としてはとらえられているが・・・、単なる環境、そこに感情はない。
- ・ 絵画、詩歌などを通して、啓発（教育）されるのがひとつの契機となり、同じところを訪れたとき、単なる環境だったものが別のものに見えてくることがある。
- ・ ここでおもしろいのが、物理的には実態は何も変わっていないが、それを見る人の見方、言い換えれば視座が変わっているということ。見方（視座）をもつことで日常のなんてことない風景がおもしろいと思えるようになったら、またそれがみんなでも共有できるとなれば、景観の価値が社会的に増えることになる。いいものをつくって景観デザインをしていくのもいいが、それと同じくらい価値があるものかもしれない。埋もれていくものを見つけて、価値をつくりあげることができないだろうか。

(テクノスケープとは)

- ・ 身の回りの景観には、なにげないもの、素朴なものが数多くある。それは、明快にデザインされているわけでもなく、へたしたら無視されているようなものも。とくに景観の価値が与えられていなかったものに、息を吹き込むことで何か価値を見いだすことはできないだろうか。
- ・ 最もデザインされていないものに工場景観（テクノスケープ）があげられる。工場は、効率・安さ・力学などを追求して形づくられたもの。デザインされていないからといって、そこに景観の価値はないのだろうか。必ずしもそうではない。価値があるという見方がある。
- ・ テクノスケープは、美的には作為がないが、景観の価値は生成している。では、作為がないにも関わらず、景観の価値が生まれるというのはどうゆうことなのか。
- ・ 景観の価値にはおおざっぱに分けると2種類ある。ひとつはそこに「社会的な意味」をともしなうもの。景観の背景にある意味に対して、わたしたちがプラスの評価している場合は、その景観を良いものだと思う。そして、もうひとつは、「美（表層）」をともしなうもの。これは、背景の意味はいつでもよくて、単純に形や見た目が非常にすばらしいという見方がある。

(芸術のとらえるテクノスケープ)

- ・ シーラーの“Classic Landscape” (1929) や古賀春江の“海” (1929) という絵画があり、そこにはテクノスケープが描かれている。その解説によれば、工業化時代が来たことによって、「富」「力」「新しさ」そういったものを礼賛すると書かれてある。つまり、当時の国を支え強大にしていた第二次産業を賞賛していた背景があり、テクノスケープはそのアイコン（象徴）として描かれていた。

(工業都市の原風景としてのテクノスケープ)

- ・ 京浜工業地帯に扇島というところがあり、ここには海水浴場があった。海水浴場を宣伝する絵葉書が残っていて、そこには工場地帯が映りこんでいた。これは意図的に入れているものと思われ、工業地帯の近くで海水浴するということが当時かっこいいこと、つまりアピールポイントになっていたと考えられる。公害問題が大きく取り上げられる前の話だが。
- ・ 学校の校歌にも工業景観があらわれている。たとえば、川崎区の臨港中学校では、次のような歌詞が出てくる。「クレーンの陰に 富士をのぞみて 工場の煙 軒に流れる」これは今もなお歌われているというところに価値があり、このようなものがあるといいものと社会がとらえているひとつの証拠だと言える。
- ・ 時代の流れによって風景の価値は移り変わっていく。工業は高度経済成長後、環境を破壊するものの象徴としてとらえられてしまい、人々の価値観が変わっていった。その結果、歌詞の一部が変更及び削除されたものもあった。しかし、産業遺産としての見方や、工場地帯のツアーなど、その価値をもう一度見直そうという動きも出てきている。(写真1)



(写真1 尼崎運河クルージング)

(埋もれているものを発掘する)

- ・ 堺市に灌漑用の風車があった。現在も農業用として活躍しているものは一基もなかったが、公園や緑地に移設や新設されているものがあつた。さらに調べてみると、設置の目的としては記憶の継承や理科の教材などであつたが残念なことに不明というところもあつた。ものはあるが、人々がその価値を継承していない。大切なものが目の前にあるのに見落としている事例。これは、誰かが発見しなければ、永遠にほうむりさらされていたかもしれない。このように地域に埋もれているものを発掘しスポットをあてるのはとても大事なことだと思っている。

【岡田先生のおすすめスポット】

in 東大阪

- ・ 枚岡にある昔の役場の建物
- ・ 町工場 人々が活動する場として町工場がある町 「町」と「工場」当然、人間生活がある スポットライトをあてていったらおもしろい
- ・ 近大商店街 日本を代表する商店街 バイエルンに匹敵するんじゃないか！？

in 八尾

- ・ 掩体壕（えんたいごう） 軍事施設で今は農機具置き場として活用 八尾人のたくましさを感じる
- ・ 八尾空港 プラスで活かしていくことを考えていけば可能性がおおいにある
- ・ 住居近くの田畑 マンションの隣に田んぼがあったりする 稲穂の香りがいい
- ・ 友井にある鉄のゲート 道に迷ったとき目印にしていた 大型車両が通らないため？
→その後、八尾市・北村さんからミミヨリナ情報 お祭りで活躍していました（写真2）



（写真2 友井にある鉄のゲート）

「食と景観」

イギリスのポーツマスに当時軍事施設であった島がある。歴史が好きな人は来るのだが、いろんな人にも来て欲しい…。ここでは、おもしろいシステムをまわして、たとえばサンデーランチをしている。海の真ん中でランチが食べられるということで、おもしろそうやなと、とりあえず人がやってくる。動機はそれだけで十分である。この島の企画運営者は、島が持つ潜在的な魅力を意識しつつ、まずは、「食」がきっかけで人を呼び、訪問者が島について興味を持って、いろいろスタッフに尋ねていくうちに、島の「食」以外の魅力に気付き、島への関心が高まるという良い循環が生まれている。

いい景観を見ながら食べるとよりおいしく感じる。おいしいものを食べながら景観プラスアルファを感じるとよりおもしろくなる。ここ大阪の東大阪、八尾には、うまいものがたくさんあり、「食と景観」をうまくリンクさせていけば、いろんな可能性が出てくると思われる。

HY 成 果

「まち歩き」を通して

例えば、まちをぶらりと歩いていると、住宅街でプランターや庭で花や緑を丹精込めて育てている家を見かける場合があります。この家に住み暮らす人は、「緑や花が好きな方かなあ」と想像が膨らみます。このように前面の道路に花を植栽している家を、みんなで「まち歩き」を行っている時に発見して、「まち歩き」参加者の一人が「住んでいる人が、毎日花に水をやり、育てていることが周辺の防犯という面でも貢献していると思う」と、実際にまちで、五感で感じたことを話します。すると、他の「まち歩き」参加者に伝わり、「ああ、そうなんだ。そんな見方もあるよね」と、参加者が多様なそれぞれの“気づき”をオモシロがり、共感すると、地域や“まち”の見方が一層、豊かに広がります。

これらのことは、今回、本研究会の活動を通じて、東大阪市、八尾市などで、それぞれ行った「まち歩き」の中で、このような新たな“気づき”を得ることを積み上げていくことで確認できました。

あらためて、“まち”に対する“気づき”とは

日々、それぞれの人の住まいや暮らしの集積によって、地域が構成されています。そのため地域には、時に当たり前のことと思われることがたくさん含まれてもいます。そこで、私たちは、地域に住み暮らす人たちが発信している地域や“まち”に対する前向きなメッセージやシグナルを読み解き、感じ取ることが、“まち”に対する“気づき”であると考えます。

“気づき”の発見感度を高めるための3つの力

“まち”に対する“気づき”と出会うためには、日頃から“気づき”の発見感度を高める必要があります。ここでは、“気づき”の発見感度を高めるために必要な力について考えてみます。

人々が、“まち”に関心を寄せていることを見つける力

先ほどの、「まち歩き」の際の草花を育てている家が一見、関係が無いと思われる地域防犯にも寄与しているということを一例として紹介しました。その地域や“まち”に住み暮らす人が普段の暮らしぶりやライフスタイルの中で行っていることが、個（プライベート）という営みや活動を越えて、公（パブリック）という部分にプラス面として、影響を及ぼし貢献していることに気づくことを、地域に住まう人々が、“まち”に関心を寄せていることを見つける力と考えます。

実際の「まち歩き」で、“まち”に関心を寄せていることを発見するためのヒント例として、
(ヒント例)

- ・ 家の前で草花を育てている→地域の美化や防犯
 - ・ 道路がいつも掃除されている→地域の美化や防犯
 - ・ お地蔵さんのお供えの花がいつもキレイ→地域の美化や防犯
 - ・ 登下校時に合わせて散歩する人がいる→子どもの安全安心
 - ・ 地域のまつりが盛んである→地域コミュニティの活動
 - ・ 地域の掲示板の表示物がしっかり管理されている→地域コミュニティの活動
- などが考えられます。

“まち”の歩みを推察する力

次に、「まち歩き」を行ってみると、ここが“まち”や地域の中心ではないかと思うことがあります。

“まち”や地域の地形や建造物等をまちが構成する要素として捉えることで、その地域や“まち”の特徴や成り立ち、歴史、文化などが多面的にわかることを、“まち”の歩みを推察できる力と考えます。

実際の「まち歩き」で、“まち”の歩みを推察するためのヒント例として、

(ヒント例)

- ・ 神社仏閣がある→歴史的に地域の中心であった（ある）可能性が高い
- ・ お地蔵さんやお墓がある→古くからのお地蔵さんやお墓なら自然災害を受けにくいところに立地
- ・ 米屋、酒屋がある
 - 昔から許認可等が必要な商売であることから地域の中心であった（ある）可能性が高い
- ・ 駅、鉄道や幹線道路の配置→地域や“まち”の形成や成り立ちがわかる
- ・ 人の流れの方向→現在、過去と人の流れが変わっていると地域や“まち”の変遷がわかる
- ・ 地元で愛されている（人気のある）店がある→地域の魅力、活力の発信力の強さがうかがえる
- ・ 隣接自治体も視野にいったマクロから見た地域や“まち”
 - 一自治体の内側からだけの狭い視点からでなく隣接自治体の関係性もふまえて、生活者として“まち”を考える

などが考えられます。

“まち”への多様な“気づき”を受け入れ、共感できる力

今回の研究会で実施した「まち歩き」においても、多くの職員が同じ場所かつ同じ時間の「まち歩き」に参加していても、参加者の“気づき”は、多様です。その“気づき”は、地域の持っている豊かさを表していて、このことを「まち歩き」に参加した者同士が互いの“気づき”として認め合い、みんなで“気づき”の多様性を受け入れ共感することが重要です。

また、「まち歩き」の際に出会った地元の方からの話もたいへん貴重なものであり、今そこに住み暮らす人たちのそれぞれの貴重な物語に直接触れ、現在進行形の地域や“まち”を体験できるよい機会です。

以上、人々が“まち”に関心を寄せていることを見つける力、“まち”の歩みを推察する力、“まち”への多様な“気づき”を受け入れ、共感できる力を3つの力として示してきましたが、それ以外にも、まちに対する“気づき”の発見感度を高めるために必要な力が存在すると思います。

“まち”の魅力の発見・発掘

今回、八尾での「まち歩き」の時、地元の方からは、地域の歴史や特に「まち歩き」の参加しているメンバーが自治体職員であることもふまえて、「もっと地域のことを勉強する必要がある」、「“まち”は常に動いているものであり、机上での考えを押し付けるようなやり方でなく、実際にたくさん体験して、地域に寄り添う関係性が重要である!」、「“まち”の楽しさを広めることが大切」などの話及びメッセージをいただきました。この話は、自治体職員が、地域に関わることの大切さと「まち歩き」＝「地域を読み解くツール（手法）」として、有効なやり方であることを示唆していると考えます。

「まち歩き」で感じたものを形にする

「まち歩き」の事前の準備段階では、事前の調査（地域や“まち”の歴史や背景、現在のまちづくりの方向性など）、土地の特徴の把握、「まち歩き」のコース設定などを考えることは、地域を知るためには有益です。ただし、「まち歩き」を実際行くと予定と違うことや時には、予期せぬこと（地元の方から話を聞くことができた、こんな所にオモシロそうな工場があったなど）が起こることがあります。これこそ、実は、「まち歩き」の醍醐味であり、大切にする必要があります。

「まち歩き」の必需品として、デジタルカメラはたいへん強い味方です。参加者各自の興味関心のあるものを撮影し、「まち歩き」後のふりかえりの際に、簡単に参加者全員に「なぜ撮影したのか」、「興味のあった点は何だったのか」など、「まち歩き」で体験した物語を撮影した画像を見せながら発表できることは、地域のオモシロさを共有し、伝播させるためにはたいへん優れた手法であると改めて今回の取り組みの中で明らかになりました。

そして、より一層、地域や“まち”のオモシロさを共有し、伝播させることを目的に、「まち歩き」が終わった後に、各自の撮影した画像と「まち歩き」時の感想やコメントを丁寧に集めておきます。後日、スライドショーで映像を見ながら、感想やコメントを添えて「まち歩き」を上映会の催しを行うことで、当日、「まち歩き」に参加できなかった人にも伝える機会を設けることができます。また、合わせて、上映会の時も、「まち歩き」後のふりかえりと同様に感想やコメントをさらにもう一度集めて、“まち”のオモシロさ、“まち”を見る際の視点、“まち”に対する思いを幾重にも積み上げていくことができ、今後のまちづくりの戦略につながる新しいヒントやアイデアを見つけることなどが期待できます。

活動を加速させるポイント

みんなでワイワイと「まち歩き」を行うことは、たいへん楽しく、普段、話すことのない職員同士など様々な組み合わせでの「まち歩き」を通じて交流を行うことができます。今まで自分は気づかなかったことを他の参加者の話や考えに触れ、それらを「触媒」にしながら、新たな地域や“まち”に対する視座を獲得でき、地域や“まち”を知るオモシロさを実感できました。地域や“まち”を知るオモシロさは、知らなかったことを知る喜びや誰かに教えたくなるうずうず感覚、「？（なぜ）」が「！（そうなんだ）」に変わるときの充実感、「“まち”を知れば知るほど、好きになれる」という好循環につながります。「知るオモシロさ」が生み出すさまざまな効果が私たちの活動を大きく加速させてくれました。特に、今回の「まち歩き」には、オブザーバー及びゲストとして近畿大学の学生をはじめ参加者のネットワークを通じて「まち歩き」に興味のあるゲストの方にもご参加いただいたことで、外部から見た意見や感想を得ることができ、地域に新しい光のあて方が生まれ、本研究会の活動に厚みが増し、改めて自分の地域や“まち”を見直すきっかけにつながっていくと考えます。

活動の輪を広げるために

本研究会の活動を広く知ってもらおうと、今回、試験的に本研究会の活動記録をホームページに掲載しましたが、ホームページの作成技術の向上やホームページの更新をはじめとする役割分担が徹底できなかった点など今後の課題となりました。また、本研究会の会議や「まち歩き」のふりかえりを行うにあたり、ファシリテーターとしてのスキル（技術）の必要性や多様な意見をとりまとめながら、報告書としてのアウトプットをしっかりと出す力量を高める必要があることもわかりました。

※【参考】東大阪・八尾広域研究会活動ホームページ → <http://www.eonet.ne.jp/~penguin-ji/hy/hy1.html>
(今後、内容を充実予定?！)

多様な違いを豊かにし、人のつながりのある元気な“まちづくり”へ

実際に、地域や“まち”を複数の人と自らが歩き、自ら見て、触れて体験して共有することが大切であることを認識しました。これらの体験は、私たち自治体職員が、窓口や電話での対応、現場での立会い、地域の集まりへの参加等の日々“まち”に関わる業務に携わっている中で、活かすことのできるヒントやアイデアが詰まっています。

あわせて本研究会は、東大阪市と八尾市の職員から構成されており、隣接する“まち”ということもあり、同じ河内の風土の共有が職員同士で実感できます。そのような中、東大阪市、八尾市の両市は、単に比較対象やライバルの自治体ではなく、「まち歩き」の参加の職員同士が、まちを歩きながら互いに語り合う中で、“まち”の違いや職員各自の職場、経験の違いを超えて良きパートナーとしての関係が今回の本研究会の活動を通じて育まれました。

今後も引き続き、本研究会では、東大阪市、八尾市の職員同士の顔の見える良き関係を醸成させていくとともに、本研究会の出会いをさらに広げていくことに努めます。また、東大阪市、八尾市の両市が多様な違いを豊かにし、人のつながりのある元気な“まちづくり”を行っていくためにも個々の職員の政策形成能力を高めていきたいと考えています。

平成 22 年 2 月 20 日に東大阪市リージョンセンター企画運営委員会連絡会主催のまちづくり・委員研修会の講師として来られていた茶谷幸治氏（ツーリズム/観光プロデューサー、イベントプロデューサー、 marketer）が、経済観光新聞に平成 20 年 4 月から 6 月にかけて「成功する『まち歩き観光』」と題してコラムを連載されていた内容が、「まち歩き」のハウツーとして良いのではないかと、講師の茶谷氏本人より研修会直後に本研究会に情報提供をいただきました。

その後、連載記事を本研究会におきまして調査した結果、今回の本研究会の活動で到達することができなかった「まち歩き」の楽しさをたくさんの人に伝播させていく際の手法のヒントが段階的に、かつ、たいへんわかりやすく解説されていることから、連載記事の要点を『成功する「まち歩き観光」へのステップ～「まち歩き」の楽しさを伝播させるヒント～』と題してまとめてみました。

また、本研究会メンバーが参加したテーマ性の高いオモシロ系地域発見・「まち歩き」関係イベントの内容についても、今後の本研究会での活動をはじめ地域へ関わる手法として、自らが企画立案の際に参考となるアイデアもたくさん含まれていることから、以下に内容を掲載するものです。

◎ 成功する「まち歩き観光」へのステップ ～「まち歩き」の楽しさを伝播させるヒント～

Step1 市民と観光客の交流拡大へ

名所旧跡観光以上に「まち歩き観光」は興味深い刺激的な観光です。

「まち」は面白さが凝縮されています。自分の暮らすまちで「まち歩き観光」をやってみると、自分のまちの魅力の再発見ができます。その結果、市民は自分が住んでいるまちが好きになり、観光客もまちの文化に惚れて繰り返しまちを訪れます。そこには市民と観光客とのふれあいが実現し、まちと人との交流が拡大するまちは磨かれよりいっそう魅力的になります。

Step2 コースづくりの考え方

「まち歩き観光」の楽しさは、そこに住んでいる人々の暮らしぶりやそれに反映している地域の歴史を直接体験することであり、人々の生活はまちのどこにでもあるはずなので、「まち歩き観光」のスタイルは日本中どここのまちでも可能な方法のはずです。

何気ない日常の商店街や市場・古くからある商家や路地裏・屋敷の土塀・階段・学校・年数を経た大きな樹木・道端の地蔵や小さな神社の社などが、「まち歩き観光」の重要な対象です。このような対象は住民の生活空間の中にも存在しているので、地域の人たちが十分合意できる範囲でコースづくりを行い、そのためには、住民にもコースづくりに参加してもらう必要があります。

Step3 住民参加によるコースづくり

「まち歩き観光」のコースづくりには、コース周辺住民の意見が十分反映されていないといけません。その訳は、外来の観光客をそのまちに受け入れる合意作りをするためなのと、生活者の視線でまちを紹介するためです。生活者の目線でコースを紹介するとは、そのまちの生活がよく見えるようなまち角や路地裏、まちのすみずみに歴史が残っていたものを再確認していくということであり、そのためには、住民の記憶や伝承を丹念に拾い集めなければなりません。

この作業には十分な時間をかけ、住民が繰り返し歩き、意見交換を重ねます。ただし、完璧なコースを作

る必要はありません。できたコースはいつでも修正ができるからです。

Step4 リピーター獲得へ多数のコースを

「まち歩き観光」の1コースは、ぶらぶら歩いてせいぜい1時間以内にとどめるのがコツです。この距離でも地図を見ながら立ち止まったり辺りを眺めたりして歩くと1時間半は、かかりますし、ガイドさんの話を聞きながらだと2時間はかかります。このような短距離のコースをたくさん作って、それらのいくつかに参加することでまちを多様に楽しむというのが正しいコースづくりです。

また、「リピーターの獲得」がよく言われていますが、観光施設や豪華な宿泊施設を完備しても簡単にはリピーターの獲得はできません。しかし、観光客が一度や二度のまち歩きでは探索しつくせないまちの魅力に取り憑かれたら、リピーターは簡単に生じます。多数のコースを設定することで、まちの隅々までまち歩きコースとしてとらえることができると同時に、コースづくりに参加する住民の数も増え、多くの住民が自分の住んでいるまちに直接的にかかわるという具体的な住民参加が実現します。

Step5 地図づくりこそまちづくり

まち歩きのコースがまとまってきたら、それを地図（マップ）に表します。地図は手書きのイラストマップが最高ですが、地図作成のパソコンソフトが充実していますので、それを活用する手もあります。名所旧跡は、もちろんですが、ユニークな商店・個性的な建物・地域の学校・川に架かる橋・街路や垣根の樹木・沿道の草花・路地のたたずまい・おもしろい看板や標識・野良猫の生態にいたるまで、そこでの生活が浮かび上がるように描きます。

マップにはルートを示すだけでなく、ルート上の事物の丁寧な解説も必要です。名所旧跡の由来や歴史紹介も大切ですが、地元住民のみが知っている情報も書き込んでください。

「まち歩き観光」の地図には、そこに住む人という重要な要素があります。ルートにいる個性豊かな人物を前面に打ち出して紹介しましょう。名物商店主でも、技芸の師匠でも、笑顔のすてきな看板娘でも、人を登場させることでその地図は生き生きと個性を発揮させます。はじめてそこにやってきた観光客でも、その地図を見ただけで思わず歩きたくくなるような、そんな地図が出来上がります。

Step6 まちの吐息を伝えよう

これからの観光のポイントはヒトを訪ねる「ヒト観光」だと言われています。あのまちのあの店でもう一度飲みたい、あの人の笑顔にもう一度会いたい、ヒト観光は何度もその人に会いたくなる観光です。知っている人がいるのといないのとでは、観光の質は大きく変わります。「まち歩き観光」はそんな欲求を満たす観光です。そこに暮らす人たちとの係わり合いのおもしろさこそ地域の本当の魅力です。

マップには、そこで生活している人の感情が伝わるような文章を書いておきましょう。港町なら漁師さん、商店街なら名物店主などそのまちを表す個性的な人の言葉がいいですね。案内文には人とまちとの関係がにじみ出るような話をぜひ載せてください。そのような地図を完成させるには、実際に地図をデザインする技量や話を集め、それを文章にする技量などそれなりのレベルの技量が必要になります。

Step7 ルートの整備は最小限にして

実際に歩くルートの整備についてです。「まち歩き観光」は地図を頼りにして歩くのが基本なのでしっかりした地図があれば合格で、標識をやたらと整備する必要はありません。

また、まち歩きの楽しさは与えられたルートに沿って歩かなければならないとすることでもありません。まち歩きは自由にそのまちを楽しむのが原則ですので、どの道を歩いてもいいのです。地図はそんな歩き方の補助に使用してもらえればいいのです。地図はその地域のいたるところで入手可能にしましょう。ルート上の商店等いろいろなところに協力をお願いして、まち歩き地図を据え置きしてもらいます。

つまり、「まち歩き観光」は地図を整えばほぼ準備完了ということになります。あとは地元が気持ちよく受け入れる意識、つまりホスピタリティが問われるだけなのです。

Step8 ガイド案内の新しい考え方

「まち歩き観光」の華は、なんといってもガイドさんによる案内です。ガイドさんに必要な技量は歴史知識ではなく、参加者と楽しく交流する態度です。日常使う方言で大いに地元の自慢話をしてください。住民の生活感覚をにじませることで「まち歩き観光」に味わいが出てくるのです。

Step9 ガイドは晴れの舞台

まち歩きツアーはガイドさんが主役になってすべてを組み立てます。コースも地図に書かれたのをそのまま従う必要はありません。地図のコースを基本にしながらその日の調子で、季節・天候・行事などに合わせて自由にコース変更すればいいです。

「まち歩き観光」のガイドさんの役割は、まちの生活文化を伝える語り部（コミュニケーター）なのです。歴史の知識は補助的な道具です。ガイドさん自身に人生やまちとのかかわりがガイドの内容に反映してくるはずです。それが「まち歩き観光」の真骨頂です。

Step10 尊敬されるガイド

住民が自分のまちの歴史や文化に親しみ、それを来訪者に伝え、観光客はまちの文化と人とのふれあいを楽しみ、そうしてまちが賑わっていく。そんなまちがまち歩きから生まれてくるのです。

まちを良くしていくには、まちを見つめる視線が必要です。無関心からは何も生まれません。まちを見続け将来へ受け継ぐ市民ガイドの目・外から評価する来訪者の目・自分の知らなかった自分のまちを再発見する市民の目、どれも重要なのです。

Step11 都市観光で都市を元気に

ごく最近になって、名所観光以上に生活文化や庶民の歴史がぎっしり詰まった都市観光がおもしろいと、みんなが気づき始めています。そのような都市の本来持っている面白みをたずねるには「まち歩き」が最良の方法です。自分の足で歩いてそのまちをパノラマのように自分の目で見ること以外に都市を味わうよい方法はありません。

「まち歩き」を工夫してみれば、都市は見事に蘇ります。まち歩きには2種類の人々が参加します。第一は外来する観光客です。第二の参加者は、実は市民です。観光客と市民を合わせた「来訪者」が地域の消費経済を回転させるのです。

Step12 都市を楽しむライフスタイルを

都市観光というのは、市民にとって「自分のまちを楽しむこと」にほかなりません。まちを歩いて、ガイドをやってみて「このまちに生きているんだ」という今までに気づかなかった感覚を味わったという人が大勢出てきました。このまちに住みこのまちに生きていく充実感が自分のまちへの愛着を一層膨らませます。

「まち歩き観光」には、このような自分のまちに対する市民の心理が隠されています。ですからそこに参加する市民の間で、また市民と観光客との間で、まちを媒介にした「ふれあい」が生じるのは当然のことなのです。人生における一期一会めぐり合いを日々体験する喜びといっても過言ではありません。それこそ都市を楽しむ最高の方法なのではないでしょうか。

成功する「まち歩き観光」へのステップまとめ

「まち歩き観光」では、地図を作り、ガイドを定番化することで実に豊かな交流のあり方が実現します。施設やイベント仕掛けで集客するのではなく、ありのままの暮らしと住民の素直な心情とで成立させることのできる観光の手法なのです。

📍 伊丹発。映像を使った「まち歩き」？ワークショップ

映像制作ワークショップ（伊丹市）報告

実施日時

平成 21 年 8 月 23 日（日） 10 時半～17 時

会場

- ・いたみホール会議室（集合、映像制作案作成、編集） ＊ホール詳細については別紙参照。
- ・伊丹市中心市街地各所（撮影）

参加者（敬称略）

八尾・東大阪チーム 6 名

{ 八尾市…網中、内野、今津、村田（一級建築士事務所^{ウーズ}UZU）
東大阪市…西村、崩谷

ほかに、自治会チーム 10 名と建築家チーム 5 名の合計 3 チームがワークショップに参加

取組概要

「鳴く虫と郷町^{ごうちょう}」の、関連イベントである「郷町ゴーゴー映画祭」に制作側として参加したもの。
この日は 9 月 5 日の映画祭本番に向けて、たった一日で映像を作る取組みを行った。

・鳴く虫と郷町

平成 21 年 9 月 4～12 日まで開催。主催者は「鳴く虫と郷町」実行委員会、伊丹市。

（以下、HP より抜粋）

江戸時代から酒造業などで栄えてきた伊丹市内の郷町界隈を舞台に鈴虫など秋の鳴く虫約 15 種 2,000 匹を展示します。

主な会場は、伊丹市立伊丹郷 町館の旧岡田家住宅・酒蔵（国指定重要文化財）と旧石橋家住宅（県指定文化財）。竹の虫カゴやツボに秋の鳴く虫を入れて、座敷や土間に展示します。郷町館 からすぐそばにある周辺商店街はもちろん、文化施設・博物館など約 20 の団体と有志が一緒になって、虫たちの声を盛り上げます。秋の夜長の 9 日間、虫たちの歌声に耳をかたむけてはいかがですか？

・郷町ゴーゴー映画祭

9 月 5 日（土）18：30～20：30 三軒寺前広場にて開催。「郷町とひととまちの魅力に迫る」をテーマにした、いたみホール主催のイベント。企画は NPO 法人 remo（記録と表現とメディアのための組織）。

当日の流れ

- 10:40～11:30 集合。ワークショップ①（映像制作案作成。別紙参照）いたみホールにて
11:40～12:30 ワークショップ②（映像制作案作成。別紙参照）いたみホールにて
12:30～13:30 昼食 CROSS ROAD CAFEにて（自治会チームもこられていた）
13:30～13:50 ワークショップ③（注意事項説明。ビデオカメラの扱いなど）
13:50～16:00 ワークショップ③（撮影。別紙参照）市内各スポット（9箇所ほど選択肢あり）。
16:00～17:00 撮影してきた映像を披露。

※ 撮影基本ルール：編集はできません。作ったストーリー通りに順番に撮影を進めていくこと！
よって、撮影場所を行ったり、来たり。あと、ズーム等はOK！

作品名・配役

「イタえもん」…オリジナルのストーリーよりも、既存のもので誰もが知っている話の方が聴衆に理解してもらいやすい、とのことで有名アニメと「伊丹」の「イタ」をかけて？ストーリー設定を利用し、タイトルを決定した。

- ・イタえもん…今津
- ・フミヤ…内野（三軒寺前広場にある化粧品屋から）
- ・白雪…西村（伊丹の小西酒造(株)の有名なお酒から）
- ・（フミヤの）ママ…村田
- ・ナレーション…崩谷
- ・監督・カメラマン…網中

ストーリー

「フミヤ！宿題終わったの！？」と勢いよくママに怒られるフミヤくん。しかしながら彼はそんなことは気にせず、頭の中は今度の白雪ちゃんとのデートのことばかり♪

と、そこにイタえもん登場！映した場所に移動できちゃう「どこでもカメラ」なるものをマントの中からおもむろに取り出し、悩めるフミヤくんに授けるのであった…。

大手酒屋の娘であり手伝いに忙しい白雪ちゃんと、喫茶「男爵」で無事おちあったフミヤくん。カメラの説明をし、行きたい場所を映し、いざ素敵などこへ！とボタンをおすと、そこは見慣れた JR 伊丹駅前の景色。

「どこやここ～」とブーたれるフミヤくと違い、白雪ちゃんは「緑も多くていいね」となかなかご機嫌です。謎のナレーションが出てきて有岡城について説明しますが、フミヤくんは今度こそ！と再度ボタンを押します。

今度は、そこそこきれいな景色の見えるビルの屋上に移動となりました。またまた「どこやここ～」となりますが、関西スーパー（本社）と飛行機を見たことによりここは伊丹、と認識する二人。最初は若干不満げだったフミヤくんも「伊丹って意外と素敵ね」と言う白雪ちゃんと一緒にいたことにより、伊丹のまちにある魅力に気づきます。

と、そこにイタえもん再度登場！そこでイタえもんにより、二人は衝撃の事実を知ることになるのだった…。

ワークショップ・撮影風景（左→右→左→右…とご覧ください）



↑映像制作案、パッケージを話し合い中。



↑remo の甲斐さんよりレクチャー。



↑撮影出発前にタイトルカード撮影。



↑まず旧石橋家にて撮影。フミヤとイタえもののやりとり&小道具・衣装も準備されていました。



↑続いて、昔ながらの雰囲気漂う喫茶店「男爵」でフミヤと白雪のやりとり。



↑有岡城跡でナラティブカード(特撮?)撮影。ハンドメイドの特撮技術です。



↑有岡城跡で再びフミヤ&白雪。



↑続いて景色のきれいなビル屋上へ。



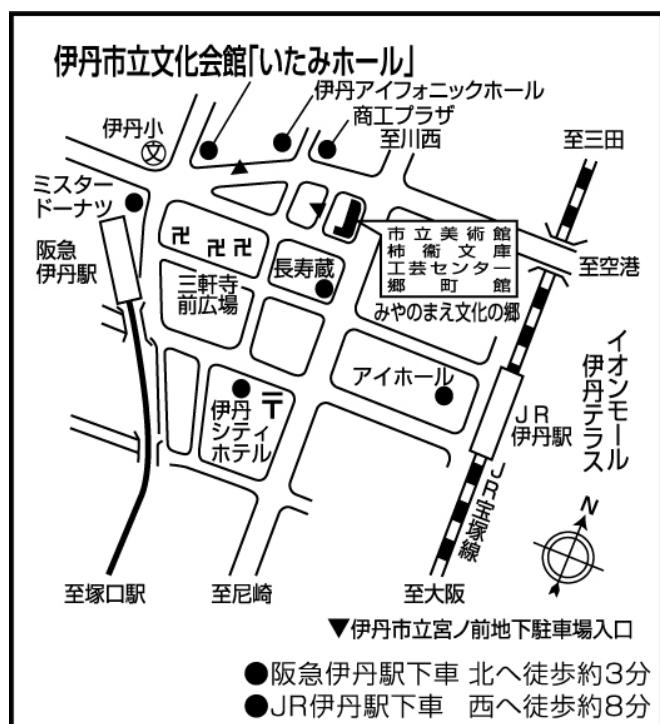
↑フミヤ&白雪撮影もクライマックス。



↑いよいよ終盤！



←撮影終了。みんなで記念写真。お疲れ～。



財団法人 伊丹市文化振興財団は、市民一人ひとりがそれぞれ独自の個性を発揮し、豊かであるおいのある市民生活を実現できるよう、設立されました。現在、アイホール、伊丹アイフォニックホール、伊丹市立工芸センター、伊丹市立美術館、いたみホール、ラストホール、伊丹郷町館 の7つの施設を主な活動拠点として、生涯学習および芸術文化活動に関わる特色ある事業を推進している。(HP より抜粋)

いたみホール

〒664-0895

兵庫県伊丹市宮ノ前1丁目1番3号

<http://hccweb1.bai.ne.jp/itamihall/>

e-mail: itamihall@hcc1.bai.ne.jp

電話 072-778-8788 FAX 072-778-8585

郷町ゴーゴー映画祭（伊丹市）報告

実施日時・会場

平成 21 年 9 月 5 日（土）18 時半～20 時半、三軒寺前広場

参加者（敬称略）

{ 八尾市…網中、内野、村田（^{ウーズ}UZU）
東大阪市…西村、福井、崩谷

ほかに、自治会チームや建築家チーム、一般市民も多数来場

概 要

「郷町とひととまちの魅力に迫る」をテーマにした、いたみホール主催のイベント。

3 部構成。三軒寺前広場には対の大きなけやきの木があり、その 2 本の木の間には大きな布を張り、映像を写していた。

1 部 18：30～19：15 道ゆきながら見ていく人も多々あり。60～70 人ほど集まっていた。

過去の伊丹市を写した映像上映。映像提供者が「この場面は何年前のもので、場所は〇〇で、こどもたちが××をして遊んでいる風景です。当時の伊丹の人々の暮らしはこんな感じでした。」など、当時の生活の様子などをおりまぜながらコメントされていた。

また、映像を見ていた別の方々からも「これは、あそこの場所ちゃうか？」など、コメントが添えられていた。

ひとつの映像を取り囲んで参加者が自由に発言できる形式をとっていたため、自分と他人、また伊丹市の昔と今をつなげることができていたと感じた。当然ながら、映像は空間を残しておける点が写真より強みがあると感じた。

2 部 19：20～19：50 途中で席を立つ人もちらほら。30～40 人ぐらい。

少子高齢化が進むとある市で、まちの活性化のために制作された映像を上映。その後は、いたみホールの方や remo の方、あと一人映像に関わってらっしゃる方の 3 人で、その映像制作に基づきながらシンポジウムを行っていた。途中で「（話が）長い」という声も出た。

3 部 19：55～20：25 30～40 人ぐらい。

8 月 23 日に制作した 3 グループのショートムービーを 1 グループずつ上映し、出演者から一言コメントし、DVD を授与。

まず、われわれの「イタえもん」より上映開始。実際大きなスクリーンで見ると少し恥ずかしさもあったが、こんな大きく写してもらって感動した。DVD 授与後は皆でレッドカーペットを歩いて席に戻った。次に建築家チームの「Oh！昼」を、続いて自治会チームの「おくられびと」を上映し、映画祭は無事終了。

「映像」が持つ特色や強み、またそれを生かした斬新なまちづくりの手法を学ぶことができた。

風景（左→右→左→右…とごらんください）



↑会場に向かうまで「鳴く虫と郷町」の取り組みと見られるものがありました↑



↑立ち寄った酒蔵で白雪とご対面



↑ここが会場です



↑黒板とその文字がかわいい



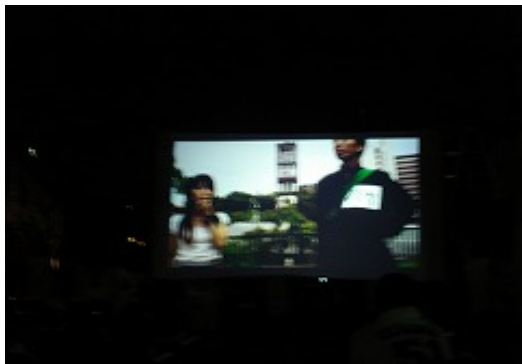
↑第1部の始まりです



↑「イタえもん」上映開始です



↑イタえもんとフミヤのやりとり



↑これは有岡城跡でのやりとりですね



↑ナラティブカードの特撮もばっちり上映



↑いよっ！監督！（一言コメント中）



↑ヒーローインタビュー☆

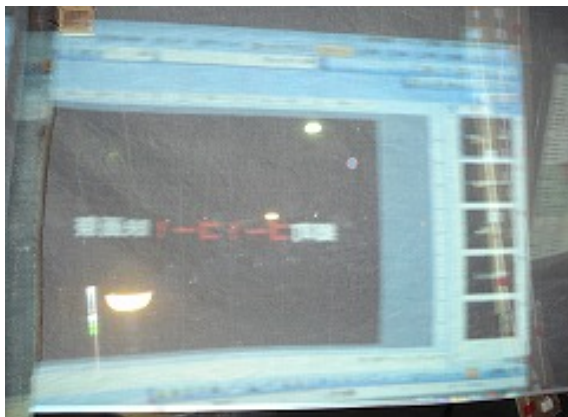


↑主演女優です♪

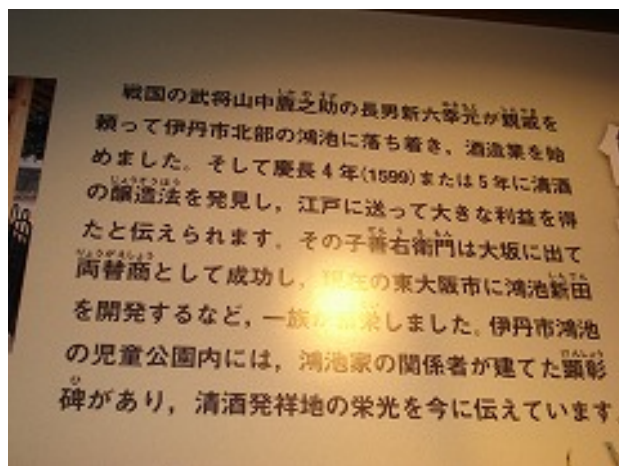


↑ママ役の村田さん





↑メインのスクリーンの隣に、も一つスクリーンがあり「郷町ゴー！ゴー！映画祭」と写してあったのですが、その仕掛けはシンプルにパワーポイントで作られていました。



↑ちなみに…東大阪の鴻池という地名は豪商・鴻池家からきていますが、そのルーツは伊丹だったそうです。驚きです。

魅力のお裾分け

相原 貴史

東大阪市と八尾市は大阪府の中央部にあり、日本で1、2の技術力を争う中小企業が密集した街で、信貴生駒連山の山ぎわの自然が豊かな街で、犯罪が多い街で、歴史的な史跡も数多くある街で、河内音頭の発祥の地であり、人情味あふれるところが長所だと思っている、他府県から遊びに来るようなテーマパークや温泉地が無いところなど共通した所の多い街です。でも、知ってるもんには、めっちゃおもしろいと思っている場所や、あまりに近くにありすぎて他人から見たらめっちゃおもしろいけど、生活の一部になって魅力に気づいていないところがいっぱいある街でもあります。

何回も自分が行きたいと思う場所や、興味のわいた建物・看板・マンホール・境界プレート・お地藏さん・におい・味・e t c・e t cを独り占めせずにみんなに言いふらそう！きっと共感してくれる人がいるはずだ。石切神社の参道はおばあちゃん原宿です。巣鴨まで行かなくても赤いパンツが買えます。雑誌に載らないおいしい店や三丁目の夕日に出てきそうな駄菓子屋もたくさんあるに違いない。

遠くにいかなくても楽しいところはたくさんある。毎日通っている道に興味を持って街を歩いてみよう。



八尾の春 玉串川の桜並木

「まち歩き」に必要なもの、それは、まちに眠っている当たり前のようにそこにあるものをおもしろいと感じる心ではないだろうか。

まちを歩いていると、細い路地に出会うことがある。「この路地の先には何があるのだろう」とちょっとわくわくするのは、小さい頃に路地裏の駄菓子屋さんへ友達に初めて連れて行ってもらった未知のスペースに足を踏み入れるときのあのちょっとした高揚感に似ているからかもしれない。「まち歩き」はそんな探検気分を思い起こさせるものがある。

まちは、自分からまちに対して「おもしろい」という気持ちを持てば、まちの方から楽しい材料を提供してくれる。地形、道路、川、木、花、店、工場、人、食べ物、家、あらゆるものがその材料になる。さらに、まちを、おもしろがる人と一緒に歩くとさらに楽しい。

「この看板レトロで存在感ある～（デジカメでパチリ）」「こんな長屋に素敵なイタメシ屋？（メニューをパチリ）」「ここは昔の川の堤の跡やで。こんなに段差があるねん。（へ～え、ほんまや）」「この猫、しっぽがまんまる～！」などなど。自分とは違う視点でまちのおもしろさを発見できる。さらに、地域を良く知る人と歩くと昔の様子がよくわかり、今では、想像もつかないたたずまいに思いをはせることもできる。いろいろな楽しみがある。健康にも良いし、お金もかからない。

いつも歩いている道から一本外れてみよう。なにか、おもしろいもの、変わったものがあるかもしれない。季節を運ぶ花の香りがしてくるかもしれない。まちを楽しんで見てみよう。そこから、「まち歩き」の楽しさが始まるはず・・・です。

下を向いて歩こう 、なんてネガティブな表現とお思いでしょ！

実は、まちにあるマンホール（ここでは、下水道のマンホールについて語ります。）に興味をもって「まち歩き」に興味を持って頂く勧めです。

① なぜ、マンホール！？

- ・ マンホールの数は、まちのバロメーターである。→とりわけここでは下水道のマンホールに特化しますが、マンホール（市章マーク入り）があるとそこは近代的なまちと言えます。（個人的見解です。）環境整備が整っており、川やしいては海的环境向上が見られるまちなのです。下水整備が発達しているって事です。
- ・ マンホール（市章）があれば、そこは公共用地（ほとんど）なのです。所謂、市道や公共敷き（里道、水路など）です。

※八尾市など一部の自治体は、承諾をとったうえ私有地にマンホールを入れる場合あり。

- ・ マンホールの絵柄を楽しもう。→「まち歩き」で迷えばマンホールをみよ！。絵柄に市町村の表示があります。迷ったとき少しは参考になるかも！？（大規模な移動で迷ったときですが・・）。あといろいろ趣向を凝らした、絵柄が存在します。

（EX）八尾市→河内木綿の機織娘、八尾の下水道キャラであるヤッタくんの絵柄など

東大阪市→ラグビーの絵柄、「ひ」東大阪市章マークを使用した梅絵柄など

USJ の敷地内通路のマンホールは、アメリカ都市のマンホールを使用しているのをご存知でしたか！？

http://homepagel.nifty.com/~n_hiro/mh_data_os2.html

<http://www1.c3-net.ne.jp/hamachan/manhoulu-sinohana.htm>



東大阪市 ラグビー絵柄



八尾市 河内木綿の機織娘

② マンホールは、なぜ丸なのは（丸が多いのか）

- ・ マンホール開口部の丸い形状は、それを囲む地面の圧力に対して最も効率的な形状であるため、その丸い開口部の蓋が丸い様相を帯びるのは自然であるから。
- ・ 円筒状の穴は掘るのが容易なため。
- ・ 丸型の鋳造は水平の型押しロール機を使用して機械切断するのがより簡単だから。

- ・丸型の蓋は丸いマンホール穴に対して、うまくはまるように回転させる必要が無いから。
- ・人間の断面もやや丸い形をしているため。(中に入る構造なため)
- ・丸いマンホールの蓋の方が簡単に転がして移動できるから。
- ・もし蓋が外れた他の形のマンホール上を自動車が通過すれば、鋭い角の部分が自動車のタイヤをパンクさせてしまう恐れがあるが、丸い形には角が無いため。
- ・文化的理由。

③ マンホールで自慢しよう楽しもう！

- ・以上の事を、記憶していざまちへ出かけましょう！新しい発見と喜びがあるはずです。
- ・マニア受けします。
- ・興味のある方は最寄りの、市町村の下水道担当課へ・・・マニアが居ます。(個人的見解です。)

マンホールのヒンジがある場所(方向)が、中にある下水道の下流方向になっています。

(開けて、降りるステップから誤って落ちて流れにくいように・・・)

最後に、「まち歩き」って、以前より意識して行動した記憶はない響きではないでしょうか？！

「まち歩き」に必須アイテムなんて要らないのが、持論でしたが、、

HYの活動に参加して思いました。

「まち歩き」に必要なもの

- ① 道具(地図最新と古図、カメラ等記憶媒体)、記憶力のよい方は何も要らないかも
- ② 人(まちに精通した人、とりわけ、モノ・人・場所・食べ物・郷土歴史に精通してる人)
- ③ 事前の情報収集資料(歴史的背景、美味しいもの処、行事日程、自治会報)

基本アイテムで思いつくものは、以上が普通だと思います。

また、行きたいと思わせる思い出、体験をすることが大切。「まち歩き」をして感じたことは、

- ① 複数人で、ワイワイ楽しく歩くこと。テーマお題は大まかに自由に設定可。
 - ② 参加した人の感想を発表しあう。違う切り口での発見が見つかる。
 - ③ 発表する場(ふりかえり)を必ず設ける。
 - ④ 記録する。(歩いた道のりを残す、写真を撮る、スケッチする、記憶する。)
 - ⑤ 発見を広げる。情報共有する。今であればブログをはじめ、HPを活用し、広くかつ浅く自慢する。
- など、単なる「まち歩き」を一度で終らせないようにする。

これが醍醐味で楽しくワイワイ参加したくなるんですね。

近年、各地で行われている「バル」なる催しは、市街地の飲食店を、食べ飲み歩きの「まち歩き」をすることで、まち全体の回遊性の向上をはかり、歩いて楽しいまちを作り出すことをめざしているものである。そのシステムは、飲食店 1 軒 600 円～800 円で、食事とお酒を提供するというものである。伊丹以外では「函館バル街」、「南紀田辺うめえバル」、「守山大人バル」等があり、最近ではそれらを参考に「奈良まちなかバル」も始まった。

5 月 22 日の第 2 回「伊丹まちなかバル」への HY 八尾チームの有志らと参加し、個人的にも 9 月 19 日の第 3 回「伊丹まちなかバル」にも参加、さらに地元奈良で開催された「奈良まちなかバル」にも参加するに至った。では、それら「まち歩き」番外編の「バル」について述べてみたい。

伊丹は、ご存知のように酒つくりのまちで、JR 伊丹駅を降りて有岡城を横目に見ながら阪急伊丹駅に向かって歩くと某清酒会社の変った門が見える。近隣には「みやのまえ文化の郷」という名称で、庭を囲むように旧岡田家住宅（店舗・酒倉）、旧石橋家住宅、美術館等があり、某清酒会社の建物と統一の取れた雰囲気、つまり街のヘソを作り出している。道も歩道部分は主にインターロッキングにし、両側の建物はやや昔風の作りに工夫し、JR と阪急の中間に広場を配置して広がり空間となっている。

「伊丹まちなかバル」は、JR、・阪急の両駅界隈を中心に実施され、約 80 店舗が参加していた。店の開店時間が異なっているので、こちらが行く時間帯によって食事内容も変わるなど、店選びも楽しみであった。また、「伊丹オトラクな一日」という音楽イベントが同時開催されており、広場や「バル」参加店内で様々な演奏を聞くことができ、食事と音楽に一度に酔いしれるという一粒で二度おいしい、まさにグリの的な楽しい内容だった。

これに対し、奈良は、駅を一步出ると線香の香りが漂うほど寺がある。千年も前に都を京都に譲り渡した歴史による雰囲気がまちにあり、東大阪、八尾、伊丹と違って観光客が大勢いる。

そのような中、9 月の 3 連休の中日に「奈良まちなかバル」を設定して行われたが、初めてということもあり、思ったよりは、参加者が少なかった。ただ、「バル」に参加した店は、赤字覚悟の充実した食事と内容を提供し、非常に満足した。

このように「バル」は、これまで知らない店に気軽に入れるという利点がある。気にいればまた店やまちを訪れるリピーターになるだろうし、まちの活性化に少しは貢献できると思う。奈良は伊丹での「バル」を見た奈良女子大の学生が提案したとも聞いたが、伊丹、奈良とも民間が主導で、行政は黒子に徹している。これら「バル」に参加して、行政職員の役割とは何か、考えさせられながら、歩き、語り、飲み、食べ続けた充実した時間だった。

①工場の楽しみ方考 ～工場に潜む間抜けな生き物たち～

工場萌えな人が増えている。何にどう惹かれるのか。

工場内に張り巡らされた巨大なパイプや煙突、訳のわからない無機質な物体が有機的に組まれた空間に、非現実的な感覚を求める人がいる。

サビにエイジングの美を感じる人がいれば、効率を最大限に上げるために生まれた緻密なデザインをカッコいいと感じる人もいるだろう。楽しみ方は様々である。

私が工場を見に行くのは、工場内に密かに埋もれている愛すべき生物たち（に見える無機物）に出会うためだ。

意図せず組まれた機器の中に突如現れる間のぬけた生物に、ふと笑いがこみ上げる。

そしてふと彼らの境遇に思いをめぐらせる。

写真は尼崎運河クルージングで見つけた「いも虫の夫婦」と、「モアイ象さん」である。

いも虫夫婦はこれからお出かけだ。モアイ象さんは休日のをんびり過ごしているのだろう。人の想像を掻き立ててやまない工場たち。ぜひ間のぬけた生き物たちを探してみしてほしい。



②被写体としてのアスファルトについて

私たちの日々の生活に当たり前に入り込んでいるアスファルト。

それらは今の未成熟な車社会において、なくてはならないモノである。

あまり意識されることはなく、感謝されることもなく、ただ敷かれているが、彼らにも様々な表情がある。

夏の暑い日、ギンギラギンに熱をもち、光をこれでもか！と照り返す。

工場の前では油を浮かべ、雨が降れば水溜りを作り、ひびが入れば小さな花を呼び込む。

そして、秋の夕暮れには私たちの影を色濃く映し出す。

そんなアスファルトを被写体として捉えることは、意外と面白い。

特に私はアスファルトに描かれる「止まれ」や「注意」の文字を好んで撮る。
なぜならば、概してそれらは道路の交差点部分や細い路地に描かれるからだ。
細い路地には人の生活感が溢れ、交差点部分には商店や、危険を察知した人の様々な工夫が見られる。面白い景観に出会えることが多い。
ぜひ、アスファルトに描かれた「止まれ」「注意」の文字に誘われるがまま、写真を撮ってみてほしい。
余談であるが、「止まれ」のデザインも、地方によって面白いものがある。たまには、下を向いて歩いてみよう。



いくつかのイベントに参加してみて感じたことは、ぶらりまちあるきも楽しいけれど、予備知識を頭に入れたまちあるきはもっと楽しいということでした。

例えば、近畿大学・久教授による講座の中で、何故神社(寺?)が集落(?)のはずれにあるのか、それは隣接する集落との間で、戦に向かう兵士が待機する要だからということを学びました。神社が建てられた意味は考えても、位置については気にしたことも疑問に思ったこともなかったので、目からうろこでした。

そういった点を頭に入れてまちあるきをすると、かつてはこの辺が集落の境だったんだな、など想像を働かせながら楽しめると思います。

歴史についても同様です。長崎に数年住んだことがあります。当時は特に長崎の歴史に興味もなく、幕末にどのようなことが起こったのかも知らず、各所を歩いていました。

・・・それから7～8年。大河ドラマ「龍馬伝」を観ていると長崎が出るわ出るわ！あのグラバー邸には龍馬がそんなに何度も足を運んでいたのか～、海援隊の活動はここから始まったのか～など、初めて知ることばかりでした。そういった歴史の知識をもった上で長崎のまちを歩いていけばもっと楽しかっただろうな～とドラマを観ながら後悔したものです。

八尾市も東大阪市も、長崎ほど有名なまちではないものの、それぞれに歴史はあるはずです。実際、何度か両市のまちあるきに参加するまでは、わざわざしおりを作って説明文を掲載するほどの隠れた名所や歴史的な建物などがあることを知りませんでした。

実際に足を運ぶまちあるきはもちろんのこと、地図や書物から学ぶまちあるきも大事にしながら、今後も八尾市と東大阪市で「あるもの探し」をできればと思います。

今回、「まちづくり」というキーワードで、八尾で暮らしてきた46年間を振り返ってみた時、近鉄八尾駅周辺の大開発による街並みや生活環境の変化が大きく感じられますが、やはり暮らし続けている生活圏の変貌というものに意識が向きました。

昨年11月の家族旅行で立ち寄った舞鶴で、赤レンガの倉庫群を活用した施設を観光しましたが、その昔に国鉄八尾駅前にあった「帝國製糸」の壁や建物の記憶が蘇りました。今でも植松地域に少しは遺っている赤レンガの建物などが、潰されるのではなく有効活用されたら良いのになぁーと、ふと思い返したのですが、このコラムの題材を思い浮かべた時に、その赤レンガと当時の街並みの風景が頭をよぎりました。

八尾市に住んで46年目を迎えようとしています。住所は1歳になる前に堺市から引越してから、ず〜と同じ居所で、JRの八尾駅から徒歩5分の位置にあります。今は家が建ち並んで見えませんが、昔は2階の北向きの窓から線路が見えました。その場所で夜中に貨物車が連結して家が揺れたり大きな音がしてました。我々家族は慣れていて何とも思いませんでしたが、田舎から来て泊まった親戚が、「地震！」と間違っ

て夜中にビックリして飛び起きて騒いだことがありました。私が子どもの頃は、ディーゼル車と汽車が往来しており、国鉄久宝寺駅が付帯していた龍華操車場には汽車の車庫がありました。そこでは、円形のターンテーブル式で汽車が格納・出庫されており、子ども心には「サンダーバードの基地」さながらに見え、とてもカッコ良かったと記憶しています。当時の国鉄八尾駅の踏み切りの北西側にあった「日通」の倉庫には、「ミゼット」の三輪トラックや、貨物車を引き込む線路がありましたが、小学校にあがる頃には「日通」の引き込み線も無くなり、踏み切りも今の位置（昔より西側）に移動しました。その古い踏み切りの北側にあった「帝國製糸」という戦前にカタン糸を紡いでた赤レンガの工場も無くなり、平成の時代に入ってからには跡地に巨大なマンションが建ち並ぶようになりました。

龍華操車場によって南北に大きく分断されていた久宝寺駅は、土手でこしらえた臨時停車場から普通停車の駅になり、その後に線路が北側に収斂されて橋上駅に生まれ変わり、快速列車の停車駅になっています。そして、ゆくゆくは新大阪駅につなげようとする大阪東線の始発駅としても運行を開始しています。線路が北側に寄ったことで、昔の下り線の辺りが新しく道路になり、宅地が変わった元国鉄の広大な所有地は、市立病院が新築移転された他、今春よりオープンする西日本最大級の高層マンションなどが建設されています。

また、小学生の時分にあった線路付近の平屋建ての国鉄官舎は、鉄筋の団地に変わって30年ほど経過した後に取り壊され、今では家電量販店の「ジョーシン電気」が八尾高校の横から移ってきました。

46年前に八尾に引越しする頃は、「ゆくゆくは国鉄八尾駅は橋上駅になり、線路も高架になって開かずの踏み切りは無くなるで。」と聞いてたようですが、列車が電化されて電車になりホームが高くなった程度の変化に留まりました。しかし、それが今後は線路は地上のままですが、改札口が隣の久宝寺駅と同様に橋上に出来て、エレベーターが設置されることになるそうです。

私の家の周りも田畑が家や駐車場に変貌しています。近所の古い家も立ち退いたりして、今や我が家が町内で一番古い家となっています。八尾駅の南側の植松町の地域は、この会での「まち歩き」で体験されたように旧村の面影が色濃く残っていますが、八尾駅の工事に伴って駅の南西側の民間駐車場がロータリーへと変貌するらしく、八尾駅から植松町地域、そして久宝寺に至る自宅周辺が、どんどんと変わっていくことになります。

このように、約50年という月日の中で、まちは変貌を遂げようとしています。よそに引越しすること

く（ナント！）地元の学校から地元の職場に通い続けている私ですが、直近でＪＲ久宝寺駅の界隈の開発が進んできたことや、ＪＲ八尾駅の建替えと周辺の開発など、この地域の住環境は格段に変化を遂げようとしています。

駅前再開発等によって、新たな街の風景が出来上がり、そこに集まる人たちの暮らしが始まることで、数多くの出逢いと様々な営みが生まれ、その中で種々の活動が展開されてくるとするならば、まちづくりは都市基盤の整備だけで出来るものではなく、そこで暮らす人々の生活と活動と共に醸成されてくるものだろうと考えます。重厚かつ戦前から現代までの激動の歴史も感じさせてくれた赤レンガの建物を含む風景は、私自身の子どもの頃の思い出の１ページでもあり、これからのまちづくりを考える時の私の原点のように感じます。



私は旅行が好きで、気づけば海外渡航回数が15回を超えていました。便利で美しい国よりも、どっちかというと不便で個性的な国が多いです。そのほうが私には面白く感じるからです。しかし、HYの活動で「毎日、暮らしてる地元にもオモロイところあるやん」と気付かせていただきました。

毎回「まち歩き」にはテーマがあり、色んな切り口で開催されましたが、歴史が古い地域であり（重要な縄文遺跡もありますし、弥生遺跡もたくさん、古墳もたくさんあるんですよ！わざわざ遠くから見に来る人がいるくらいです。知ってました？）、まだまだ可能性を秘めていて、報告書の提出があろうが無かろうが、色んな角度で切りまくって歩き倒したいな…と思っていたところ、個人的な事情で途中退場することになってしまいました。もうすぐ遠い北関東に転居するのですが、もしも出身地について聞かれたら、熱く語ることができそうです（相手が聞いてようが聞いてまいが関係なし）。

しかし…少し離れて客観的に感じるのは、一番面白かったのは、HYの濃いキャラ揃いのメンバーでした。あのメンバーで歩いたからこそその面白さ、楽しさがありました。縁あって八尾、東大阪に絡み、育まれたメンバーの皆さん。まちの魅力のひとつになってますよ！北関東の人に、深い意味を含めた真意が伝わるかどうか分かりませんが、まずは胸を張って「人がオモロイよ！」って言います。河内といえばガラが悪い、治安が悪い…という一般的なイメージがあり…、「それだけじゃないよ！」「人もまちもオモロイねん！そこも他には負けへんでええ！」っていうことを、まずは府内で発信する機会があることに幸せを感じます。最後までご協力できなかった分、府外（しかも遠く離れた茨城県）でささやかながら発信しようと思います。そして、活動を通じて学んだ、「なんしか面白がっちゃえ」精神を発揮し、細かいところにもツッコミを入れ、日常を楽しく生きて行こうと思います！

東大阪・八尾広域研究会（HY）北関東支部長より

私の「まち歩き」の楽しみ方

○民家編

古い街並なら、家によって鬼瓦や軒瓦の違いがわかります。植松のまちあるきでは鬼瓦に桃が乗っていたり、軒瓦に家紋が入っていたり見つけたときはとても感動しました。洒落た家なら「とい」や「うだつ」に模様が入っていたりします。

○商店街編

商店街にはそのまちのカラーを打ち出そうとしているところが多く、キャラクターがそこかしこに隠れています。うかうかしていたら通り過ぎます。

瓢箪山商店街なら「ひょうたん」で、瓢箪型の提灯、外灯モチーフ、車止めアーケードの飾りなど。布施商店街は「えべっさん」、駅を降りた瞬間からえべっさんの看板がお出迎えです。東花園は花園ラグビー場があるのでラグビー関連のものが隠れています。

ここは何かな？と探しながら歩くのも面白いです。

○寺社仏閣は意匠の宝庫

お寺や神社にはいると、そこは意匠の宝庫。お手水の龍や香炉の形、燈籠に鳳凰の頭がつけられていたりします。そこかしこに素敵な模様があり、私の写真は局部写真ばかりで、後から見ると何を撮ったのかわかりませんが、とりあえず寺社仏閣の単純化された文様がすばらしいです。

○何でこんなものが?!編

看板やマークも要注意。ほったらかしにされて30年前ちゃうの？というボンカレーのホーロー製の看板、薬局前のケロヨン人形などは初級編です。

橋の欄干とか一見無意味そうに見えるもの、池島弥生橋は最高でしたね。

「NO ○○、NO LIFE」編は色々見かけますが、「NO PARKING NO LIFE」はわけわからず、見つけたときの喜びはひとしおです。

宇宙と交信しているような建物、団地の中に巨大ろうそくが出現!?とか、心に引っかかる風景探しという目的で、気軽に出かけてみてはどうでしょう。

今までに参加した「まち歩き」で1番印象に残っているのは、尼崎運河クルーズ＋尼崎駅前商店街のまちを歩いたことです。

尼崎運河クルーズでは、今まで見たことのない視点からまちを見ることができて、よかったです。一度その視点を身に付けると（興味を持つようになると）普段のまちのあちこちにある工場が気になるようになりました。

このことから、まちに興味のない人でも一度参加すると少しでも、まちを見る際の視点ができ、まちの見方が変わるなあと思いました。

そして、尼崎の商店街では、みんなで「おいしい、おいしい」（買い食い?!）と歩いているだけで楽しかったです。また、布施でも同じような「まち歩き」が、できそうに思いました。

あと、私は八尾の「まち歩き」には参加していないので、八尾についての発見ができなかったことが残念でしたが、今回の活動を通して、たくさんの情報を手に入れることができたことが、とても勉強になりました。



東大阪市キャラクター “トライクン”

私は、HYの初期の活動にしかできませんでした。そんな少しの経験でしたが、“まち”には様々な活動をしている人やユニークな考えを持っている人がいて、そういう生き生きとした人たちと交わることで、自分自身の考えの幅が広がるものだなあと感じました。

人はみなそれぞれ好きなもの・得意なものがあります。「好きこそ物の上手なれ」ということわざがありますが、それぞれの得意なものを自分だけで終わらせるのではなく、“まち”づくりに生かすことを考え、実行することができれば、“まち”は、さらに楽しいものになっていくのではないかと思います。

HYの活動「まち歩き」を通して、ほんの少しかもしれませんが、“まち”の面白そうな種、面白くさせるための種のまき方を見つけることができました。今後の自分自身の活動に生かすことができれば嬉しいです。今回活動に参加させていただき、ありがとうございました。



八尾の特産“若ごぼう”

私は生まれも育ちも藤井寺市（八尾市の南隣）です。縁あって東大阪市で仕事に就いて8年。実際に“まちに出る”仕事が多かったせいか、ずいぶん地理にも詳しくなったように思います。それでもやはり、ネイティヴ（？）ではないという負い目があり、地元民以上に東大阪市のことを知りたいと躍起になっていた部分もあります。

一方で八尾市はというと、藤井寺市の隣ということもあり、就職前は東大阪市よりもずっと身近な町でした。子どもの頃のかかりつけは八尾市の病院だったし、親友が住んでいたのでよく遊びにも行きました。今でも、マイカー通勤をしていることもあり、毎日八尾市を縦断しています。それでもやっぱり、八尾市にも住んだことはなく、ここでもヨソモノには違いありません。

そんな微妙な立ち位置に少しとまどいながら、東大阪・八尾広域研究会に参加することになったのです。最初は、八尾市の皆さんの、地元愛の強さに圧倒されましたが、回を重ねるごとに、そのアットホームな雰囲気のおかげで、何となく東大阪市だけじゃなく、八尾市も自分の第二の故郷のような気がしてきました（大袈裟ですが）。もちろん、地元の皆さんのエピソードを聞きながら、みんなでまちを歩いたことも、親近感が芽生えた大きな要素です。

自分にとって、勤務先である東大阪市と、生まれ育って今も暮らす藤井寺市が、職住分離で On-Off 切り替えの様な関係にあったと思います。その間にある八尾市に「縁」ができたことで、藤井寺―八尾―東大阪がつながり、まるで自分のホームタウンがぐーんと広がったように感じられるようになったのは、本当に大きな成果だったと思います。

さてここで、東大阪と八尾の地域性の共通項を、歴史的な経緯を踏まえて考えてみたいと思います。やはり最大の要素として、旧大和川流域であるという点が挙げられます。大和川の付け替えは、洪水が減少させただけでなく、旧河道の新田開発で広大な農地が生まれ、河内木綿などの商品作物も栽培されるなど、地域の発展に大きく寄与しました。その名残は、鴻池新田会所（東大阪市）や安中新田会所（八尾市）に見ることができます。また、複雑な流路の旧大和川は、長瀬川など農業用水（のちに工業排水用）として規模を大幅に縮小して残されたものもあるが、その大部分は暗渠化ないしは埋め立てによって姿を消しました。そして、東大阪や八尾のまちを歩くとき、この旧河道が景観上のアクセントになっていることが多いことに気づきます。

不自然な段差、あるいは不自然な線を描く道路や行政区画。東大阪の菱屋西や菱屋東、八尾の山本などはその特徴がよくわかって面白いと思います。古地図や古い地形図を持参して、ひたすら川の面影を探すまち歩きも楽しいに違いありません。

さて、繰り返しになるが、私は生まれも育ちも藤井寺市です。おぼろげな記憶であるが、小学生のころ、郷土史を習う機会があり、そこで大和川付け替えの話を聞きました。藤井寺市は、新大和川の開削により、農地が奪われ、村が分断され、さらには天井川となった新大和川の氾濫に悩まされ続けてきたといえます。今でもその名残で、藤井寺市には大和川に分断された飛び地のような地域があります。同じような話は、松原市などでも聞いたことがあります。いつの世も公共事業は利害調整が難しいものだという例ではないでしょうか。

今後も、東大阪や八尾、そしてマイホームタウン藤井寺のまちを歩き、それぞれの地域の特性、歴史、魅力、あるいは課題を考えていきたいと思います。

彼女は悩めるサラリーマンである。学生という、悩むことが奨励され、許される身分をとうに卒業してしまったが、いまだにふわふわとしたモラトリアム人間である。ちなみに女子である。28歳である。女子でこれぐらいの年頃ならオシャレに精を出してるだとか、いわゆる恋バナについてでも書けばいいのかしら、と言っているが、彼女にその引き出しはまだ、ない。

彼女はメンドくさがり屋である。しかし、それ故に単純明快なことを好む人間である。たとえば、二足歩行の動物であるヒトにとって移動するための単純な動作―「歩く」―は苦ではないと考えているようだ。

彼女は欲深い思考も併せ持つ。故に、目の前にニンジンがぶら下がっているとすぐ飛びつく人間である。「効果」「効用」「メリット」「お得」なんて類の言葉が大好きなようである。たとえば、単純な動作であるはずの「歩く」ことにもそれなりに「効用」の意味を見出そうと躍起になっている。彼女によるとそれを以下のとおり教えてくれた。

まず、基礎代謝があがることで体脂肪が燃えやすい体となり、ダイエットにつながるそうだ。また、シナプスという脳神経の配線回路のつながりもよくなり、脳に酸素と血液が行き渡ることによって脳が冴えるそうだ。また、中枢神経系に存在する神経伝達物質であるドーパミンが高まり、楽しいことや希望を考える頭へとシフトするらしい。そして歩き続けると、そのことを実現するためにはどうすべきか、と脳内で考えをまとめはじめるそうだ。

よく研究者などが研究に行き詰った場合、頭を空っぽにし、ぶらぶらと散歩をしていると突然アイディアがひらめくという話があるが、それは上述のシナプスやドーパミンの働きによるのではないだろうか。

また、瞑想の一つに「歩き瞑想」なるものがあるそうだ。たとえば、約1,400kmの行程となる四国八十八ヶ所巡りではバスやタクシーなどの手段がある中で、歩き遍路が人気であるのは「歩くことで自分を見つめ直し、無心になれる」という理由だそうだが、歩き遍路は歩き瞑想につながり、そのカラクリは同じことだろう。

お遍路で被る菅笠には「迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何処有南北」と書かれている。「迷うから自分の範囲から抜け出せず己の欲に執着する。悟りを開けば十方は空。もともと東西なんてなく、どこに南北があるのか。」という意味だそうだ。この言葉と共に歩を進めるお遍路、死ぬまでには経験しておきたいものだと感じた。

よく悩んでいる彼女だから、ここまで歩きの効用を調べたのならお遍路で解脱しておいでよ、と声をかけたがなんやかんやと理由をつけ結局行っていない。でも、身近なところでまち歩きをたまにやっているらしい。しかも、一人で歩くのもいいけど、やっぱり一人はさびしいから友達と歩くのが楽しい、なんて言っている。うん、たしかに、なるほどね。(終)

ここで言うファインダーは、カメラに付いているそれをさすものではありません。カメラが嫌い？いえいえ、むしろ好きです。大好きです！まち歩きの際にも大活躍で必需品になったぐらい。少し脱線しますが、ぼくのカメラは、リコーのGR デジタルⅡ。広角 28mm は、人間の視角より若干広いと言われていますが、街並みを描写するにはもってこいです。うまく言えませんが、なんともおさまりがいいんです。

さてさて、ハナシを戻しまして…。自分の実感を大切にしながら、カメラで撮りたいものを撮る。それも楽しいことなのですが、今回のまち歩きを通じて、別の楽しみ方を発見しちゃいました。ポイントは、“みんなで一緒に” 取り組んだところにあるようです。

みんなでまちを歩いていると、「ぼくが見ているまちと、あなたが見ているまちは同じようで同じでない」と気づかされます。街並みなどの実態は、誰の目にも同じように映っているはずなのに、評価するとなると異なることがしばしば。ぼくにとってなんてことないことが、ほかの誰かにとってはめっちゃ気になることだったりします。

これはある意味当然のことなのかもしれません。なぜなら、メンバーそれぞれの生活体験や記憶、思想や知識、好みなどが違いますもんね。だから同じものを見ても、その人の中で想起された“心の中にできあがる姿”は同じとは限らない。

では、まちについての評価が異なるのはいいことなのでしょうか。何度か「まち歩き」をしてみたなかで、ぼくはいいことだと思えるようになりました。評価が多様に存在すること自体がすばらしいことであり、そして、その中から「みんなの共通意識とは何なのか」ということを探り出していければ、おのずと“まちらしさ”がみえてくると考えています。また、そこには“楽しさ”というやつが潜んでいるとも感じています。「へえ～、あの人はあれを見てあんなふうに感じることができるんや～。おもしろいなあ。」というぐあいに。

こんなふうに思えるようになってからでしょうか。カメラのファインダーを通して見るまちよりも、周りにいる“人”を通して見るまちのほうに興味がシフトしていきました。つまり、ぼくにとってまちを見るための、まちを知るためのファインダーは、“人”そのもののなのです。

ですから、「まち歩き」のときには、ほかのメンバーが何を撮っているのか、何をつぶやいているのかなど、興味を示しているものを見つけては、(もちろんできっこないですが) その人になったつもりでまちを見えます。いろんな人を通して、いろんな角度からまちを見る。“みんなで一緒に” 取り組んだからこそできたことです。

以上のことは、研究して研究してぼくが気づいたというカンジではなくて、自然とそうしていたという表現のほうがしっくりきます。「まち歩き」をはじめた当初は、何のためにするのか、どんな成果が得られるのかとよく考えていました。何をやるにしても事前によく考えて、それをする価値があるのかないのか判断することがあると思います。もちろん、それも大事なことだと思うのですが、一方で、今回の「まち歩き」のように、何かよくわからなくても、無目的でも、とりあえずやってみることが大事な場合もあると知りました。そのように感じさせてくれたのは、「それっておもしろいなあ」と言ってくれる、多様性の理解を原点にもった、いつでも楽しむことを忘れない“ゆかいな”メンバーがいたから。そのあたたかな光に導かれて、ぼくは活動をはじめることになり、今も続けているんだなとそう感じています。

東大阪と八尾、仲間であればよいと思います。

ともに「中河内」と呼ばれるエリアの市。私が河内というものを感じたのは、忘れもしない中学1年生の春。大阪市内に住んでいた私は、わけあって、東大阪市内の樟蔭中学校に入学。当時、この学校の生徒は、生駒・学園前系、東大阪・八尾系の二派が主流。前者の説明は省略しますが、東大阪・八尾系のクラスメートは元気がよかった！東大阪・八尾系生徒のコミュニケーションで驚いたのは、「自分なあ・・・」で始まる会話。30年以上昔のできごとですが、センセーショナルな響きでした。これは東大阪市内の旧村エリアに暮らす先生も使っていて、オドロキ。この用語が二人称を意味するものだとわかるまで、少々時間がかかったし、違和感も無いわけではなかったけど、何ともフレンドリーな表現だと思います。言語学的なことを調べたことはありませんが、これは河内らしさを実感する印象的なできごとでした。根底には、他人のことをほっとけない、自分のことのように感じ・考える、世話好きな河内人の気質の現れだと今でも思います。おそらく、こういう部分は、市域に関係なく、東大阪市・八尾市に共通していると、改めて感じるこの頃です。

時が流れて、平成に入り、縁あって、私は八尾市役所に就職。北隣の東大阪を日々意識しているかといえば、そうでもない。ただ、人口の流入・流出をみても、東大阪・八尾間を往来する人が多いのは統計的にも明らか。ともに「ものづくり」を誇るまちで、両市に拠点をお持ちの企業さんも結構多い。たぶん、人々の日常生活を考えても、市の境界を意識することなく、買い物、通学、通院などが行われている。地方自治体の役割が肥大化するなか、両市が敵になる必要はまったくなく、連携できるものは連携すればよいし、モノによっては共同化も有効でしょう。そして、ほどよいライバル関係でもあり、これからの時代を生き抜く「河内の仲間」であればよいと考えます。



学校法人樟蔭学園記念館

大正モダンの雰囲気を感じ、現在に伝える建造物で、学園のシンボリックな建物

HY の「まち歩き」活動を重ねて気付いた事は、最初の一步のふみ出しやすさです。

食べ歩きでも良い、隠れた特産品を探す為でも良い、自分の関わる地域の事を知りたいからでも良い、自分が経験していない部分のお話が聞くことができるからでも良い、大きな志はゆったりとでも共有しつつ、それぞれの人が細かな動機を持っていました。

そんな細かな所を歩きながら話したり、「まち歩き」後にちょっとした反省会を行うことで、初めは自分の好きなところを。次はちょっと他の人が見てた面白いところを見ながら歩いたりすることでちょっとずつ自分の視野が広がる楽しみを感じていました。

それは、クレームへの対応の極意の伝達、回転寿司発祥の歴史や地域活動に熱心な人の存在などの情報、知り合いの知り合いの人から生々しいまちの話を聞く楽しみといったソフト的な話から、同じ道路なのに管理者の違う道路の存在、中々普段意識しないような土木構造物の存在意義の再認識、時代の流れを感じられるようなまちのお店、見逃してしまいがちなおしゃれな看板、バブリーな時代に作られたであろう構造物への感想の言い合いなどのハード的な話まで様々なジャンルのお話が出来ました。

パソコンなど情報メディアが発展し何でもすぐに一般解を求められるようになった現代の、例えば一般的な観光やミシュランの様に「星を集め先を急ぐ」ような感性の画一化に反し、都市の計画者としてその環境の特異性に気が付かせてくれるような非常にリアルな体験価値を与えてくれました。その体験は「いま、ここで、この人と」しか体験できないもので非常に楽しいものであり、一回経験してしまうと次にこの活動以外の時にも無意識的に意識してしまうような自然な心地良さを感じる経験でした。

今回の HY の活動のように一人ひとりが自分のモチベーションで持って行動をする活動。

それは D. ピンクが「モチベーション 3.0」という概念を提起している事と無関係ではないと考えます。ピンクは、動機を生み出す OS として、「モチベーション 1.0」は生を獲得するための本能的なもの、「モチベーション 2.0」は報酬と処罰、いわゆるアメとムチによるもの、そして「モチベーション 3.0」は自発的なもの、と整理しています。今までは「モチベーション 2.0」が機能してきたが、そろそろ OS を交換する時期であると彼は指摘しています。新しい時代の組織、思考、実行に対する意識、特に独創性や構想を練る能力が求められる分野においては、「自主決定性」という人間に備わった生来の能力が行動の原理だと指摘している。自律性は全体的な幸福感、個人のパフォーマンス、姿勢に強い影響を与える。つまり「楽しいから」という内発的動機づけこそが多くの人に共感する動機付けといえると考えられます。

新たな時代にいて、創造的な展開を望むときには、このような「自由」な雰囲気の中に「自律的」な人々が「自発的」に集まってくることがきっかけになってくるのではないかと考えます。

そして、集まった人々が、対話を繰り返すことによって「共通理解」をし、熱中して仕事をしている仲間の感情空間に入り込むと、「祭りの賑わいの中に入ると周囲の熱気に感染して多くの人がうきうきとエネルギーを生み出す」ような「心理的共振」を生み出すのではないのでしょうか。そうした、しくみをつくりだしていくことが求められると考え、そうした、しくみを誘発するような活動に学生ながら参加できたことを幸せに思っています。

本当にありがとうございました。

歴史的に有名な名所や旧跡をたどる歴史ウォークはたくさんありますが、名所図会に描かれている場所を訪ねるだけでなく、当時の姿と今とを見比べる趣向のまち歩きは珍しいと思いますのでご案内いたします。

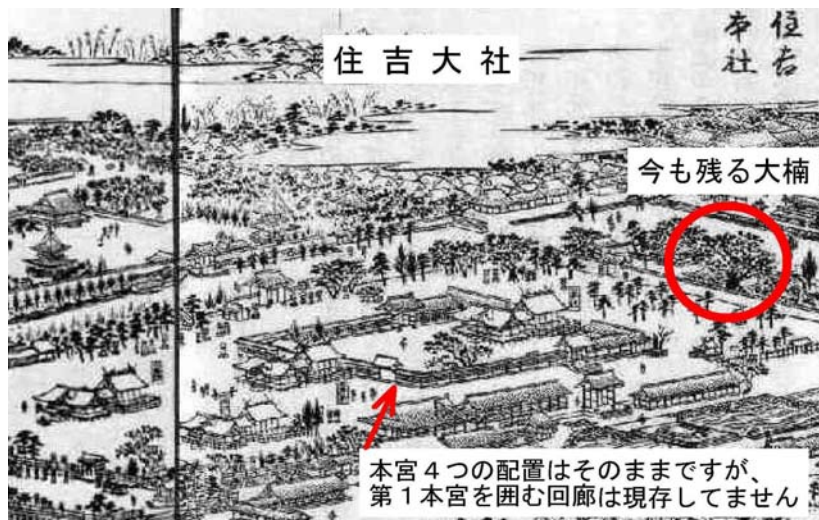
「都市の歩き方・名所編」と銘打つこの「まち歩き」は、兵庫県三田市にある人と自然の博物館（ひと博）の田原先生が企画する、江戸時代の名所案内記である名所図会（めいしょずえ）を手にも都市の今昔を訪ねて歩く「まち歩き」です。

名所図会とは今で言う旅行案内みたいなもので、京都の名所の様子を収めた都名所図会（安永九(1780)年刊行）のヒットを受け、摂津名所図会、河内名所図会、泉名所図会、伊勢参宮名所図会など各地を描く名所図会が次々と刊行されました。

「都市の歩き方・名所編」では、主に摂津名所図会や西国名所図会に描かれた地点を巡っていますので、西は姫路から南は住吉大社あたり、東は高槻あたりまでの各地に30近いコースが出来上がっています。

このまち歩きの特色は冒頭にもありますように、ただ単に名所図会に載っている名所を訪ね歩くだけでなく、名所図会に描かれた200年前の様子と今の様子の違いを比較して面白がろうというところにあります。

200年という年月を経て、すでに何の痕跡も無い場合や跡地を示す碑が残っているだけという地点もあるのですが、建物や地形の様子がそのままだったり、描かれている巨木が今も残っているなど、当時の様子が読み取れることも多くあります。このまち歩きを企画している田原先生が名所図会に注目するようになったキッカケは、名所図会に描かれている巨木が今どうなっているのかということに興味をもったからだそうです。



住吉大社：

本宮が奥から3つ手前に並び、第3本宮の横に第4本宮が配置されている様子は今もそのままですが、第1本宮を囲んでいる回廊は現存していません。

第1本宮の奥に見える大木（クスノキ）は今も残っています。

昔のままではない場合でも、その変化に注目すると色々読み取れることがあります。たとえば、名所図会では南向きだった本殿が今は西を向いているといったところがあります。経過を聞いてみると南を通る街道筋の往来が廃れてしまったのでもともと西側にあった集落の方に向きが変わったらしいということでした。また昔の大阪の寺社仏閣に植わっている木の大半が松だった等々、いろいろな情報が読み取れるのです。

大阪には摂津名所図会以外にも河内名所図会や泉名所図会などいくつも名所図会があります。各地の図書館には名所図会が収められていると思います。また、当時の和綴じ本ではなく手軽に閲覧できる復刻版とい

うのもあります。

また、名所ポイントを巡るのでしたら、少しくらい歴史の予備知識があるほうがより多くのものが見えてきてオモシロいものです。

ちょうど今、大阪の歴史を学ぶのにもってこいの講座があります。

中之島に住む人・働く人・学ぶ人をはじめ、「橋を渡る人はみな島民」と銘打ち、中之島エリアのネタを縦横無尽に紹介している月刊誌「月刊島民」を編集する140B（イチヨンマルビィ）が、大阪を学び面白い場「ナカノシマ大学」を企画しています。そこでは大阪の色々なテーマについて学べる講座を開催しているのですが、その中で「大阪の歴史を学びなおす」というシリーズ講座が開催されています。大阪の成り立ちから見えてくる歴史が学べるいい機会だと思います。

名所図会片手に皆さんの地域にある名所ポイントを巡ってみてはいかがでしょうか？

約10年前に、八尾と東大阪の合同研修で知り合った職員同士で、「隣の市だし、仲よろしよなあー」を合言葉に、懇親会と称した飲み会をしていました。そのうち、「一緒に飲んでもの楽しいけど、何かおもしろいことしたいなあ」という話がきっかけとなり、自分の住んでる、働いてるまちって、「知ってるようで、知らんとこあるんと違うかな?」、「お互いのまちの、ええところ見つけて、何とかまちが元気になって欲しいなあ」という思いで、ひとつの方法として「まち歩き」を始めることになりました。

まず、研究会の最初の会合で、お互いの市のイメージなどを話しあってみると、「へー八尾って、ダサイと思われてるんや」、「東大阪のイメージって、やっぱり中小企業のまちかな?」、「東大阪はラクビーやで」、「八尾には、八尾空港がありますよね」、「八尾って河内音頭やなあ」など、お互い価値観の違いや、気づかないところがたくさんありました。

そして、実際、「まち歩き」を行ってみると、「へーこんなところに養豚場が、今でも残ってるんや。そういえば、八尾も昔は養鶏場がたくさんあったな」、「この大きな塔って、携帯電話のアンテナって知らなかったわ」、「このコロッケが美味しいよ」、「八尾も東大阪も、古い神社・仏閣が多いなあ」などなど、今まで気づかなかったところや、お店等、他市の「ええところ」を再発見できました。また、まちの再発見もありましたが、様々な方と一緒に「まち歩き」を行いながら、お知合いになれたり、情報交換も出来たことは、非常に有意義なことでした。

難しい理屈を抜きにして、まず、自らが“まち”に出て体験することが何より楽しく、さらに、みんなで“まち”を介して様々な体験をすることで、新しい発見がより増え、すごく楽しいものになっていきます。これからも、みんなで、「まち歩き」を続けるとともに、次なるHYの活動に向けて、歩みを進めていきたいと思います。



①段差は語る。地形を読み解くコツ。

まちを歩いていると平坦な土地なのに坂があったり、段差があったりすることに気がつく。これはその土地の歴史を物語っていることが多い。

大阪市には有名な上町台地があるし、本研究会の地元の河内平野では、昔の大和川の川跡であった長瀬川、玉串川、吉田川などの跡地は、昔の川幅までが高台となっている。これはこれらの川が天井川であったこと、そして古大和川を今の堺の方向に付け替えた後、川の堤防までの高さに埋め立てたことを示している。

また、まちを歩いていると古い住宅（概ね昭和30～40年代以前）は、道路から数十センチ土を盛って建てていることがある。また、土蔵などのある旧家では、（大切なものをしまっておくための）蔵は、屋敷のなかに更に石を積み上げて高くしていることもある。これは、その昔排水施設の整備が不十分であったころ、浸水が多発した地域であることが考えられる。その他にも、昔の集落や建物は周辺の田畑から一段高く土を盛って形づくられることがあり、旧の集落と新興住宅地に少し高低差があることも多い。

旧の集落地には必ずといっていいほど、神社（氏神さん）があるので、みなさんも一度お近くの神社を中心とする旧集落の範囲を巡ってみてはいかが。

（写真：道路に突然現れる階段）



②隠れた逸品を知る、それもまた楽し

まちには「おいしいもの」がたくさんある。いわゆる名産品や全国的に名前が売れているものでなく、極めてローカルな名物である。そんな「隠れた逸品」を知ること、また「まち歩き」の楽しさではないだろうか。

古くからある町並みにひっそりと佇む和菓子の老舗、商店街の奥まったところにある間口の狭い天ぷら屋、店内が煤と油にまみれた焼き鳥屋、出来立ての製品を売っている洋菓子工場など、雑誌では紹介されないけれど、「その近くに住む住民の中では、有名なお店と名物が必ずある。」と断言してもいいくらいだ。

「まち歩き」が好きな職員の頭脳には、こんな逸品が大量にデータベース化されている。しかしこのデータベース、難儀なのは「可視化」できていないし、当人にはそのつもりもない。どうも当人には「隠れた逸品を自分が知っている」という意識がそもそもないようである。しかし、当人と連れ立って「まち歩き」をしていると、この逸品のデータベースから、とめどなく情報が出てくるので、それを捕まえるのである。そんな「隠れた逸品」を効率的に知ることができるのも、お隣さんと共同の「まち歩き」の効用のひとつである。

HY の活動への今後の期待 ～ 広角にかつ高所から、“まち”を俯瞰して考えてみる ～**東大阪・八尾広域研究会（HY）代表 アミナカ タカユキ**

「私たちのまちには、コンサートができる文化施設もあれば、体育施設等もあります。」と自分たちのまちを紹介することがあります。経済情勢が右肩上がりで税収の伸びも期待できた頃、自治体は、先を争うように公共施設の建設、いわゆるハコモノの整備を行ってきました。しかし、東大阪市、八尾市に限らず地方自治体の財政状況は厳しく、施設の維持管理も含めたライフサイクルコストを今後どのように考えていくかが課題となっています。

そのような中で、市民、利用者側は、施設の配置、施設の特色や利用目的から考えてどこの施設でサービスを受けるかを決めます。例えば八尾市の北東部には、八尾市立屋内プール「しぶき」があり、隣接する東大阪の方の利用も多いと聞きます。また、八尾市の南西部に隣接する大阪市には、手作り工芸の総合施設である大阪市立クラフトパークがあり、八尾市から見た場合、隣の市の公共施設ではありますが、本施設の特色や交通機関の最寄り駅が八尾市にある JR 久宝寺駅であることで、八尾市民やおおさか東線を利用する東大阪市民がもっと利用することを推奨してもよいと考えます。

これらは、ハコモノの配置や公共施設のサービス内容等から見た一例ではありますが、生活者の視点に立ちながら、自治体を単体のみで捉えるのではなく、地域を広い視野で俯瞰して再考する必要があるのではとの思いを以前から持っていました。また、私たち自治体職員は、市役所のある場所を自治体の中心軸として机上のみで考え、市の境界で自治体や地域が行政として完結していると考えられる傾向が見受けられます。

しかしながら、今回の本研究会の活動では、東大阪市の職員と八尾市の職員たちが垣根を越えたフラットな関係で、複数自治体による広域の研究会活動でのアプローチにより、広い視野で高所から、かつ複眼で、地域に根ざしたことを考察することにつながり、今後も引き続き研究を深めていくことができるテーマであると考えます。

特に、隣接自治体の広域での公共施設等のハード面での地域資源の相互利用の可能性のみならず、イベントなどのソフト面での相互交流に今後の可能性があると考えています。今回の「まち歩き」を開催するために東大阪市、八尾市の職員がそれぞれホスト役を引き受けて実施した「まち歩き」を行う中で、お互いの地域でのイベント等を相互に交流、利用した情報発信の可能性などが、まだまだあるのではないかと感じました。（図 モヤモヤアイデアたち 参照↓）

そして、超高齢社会へ進む中では、市民生活において車等の交通手段を用いての遠距離での移動を伴う頻度は、ある意味、限定されていくことが想定されます。日常の生活圏の中で、人々の身近な地域での日々の暮らしぶりのそれぞれの物語の中で生まれる、新たな発見や出会い、それらを有益な情報としてキャッチできる力、パス（発信）する力をさらに高めることが重要であると考えます。自然、産業、グルメをはじめ地域のまつりや行事などの歳時記などを広域という横に広げた広角な視点で持って、高所から俯瞰して考えてみる技術（スキル）が求められます。

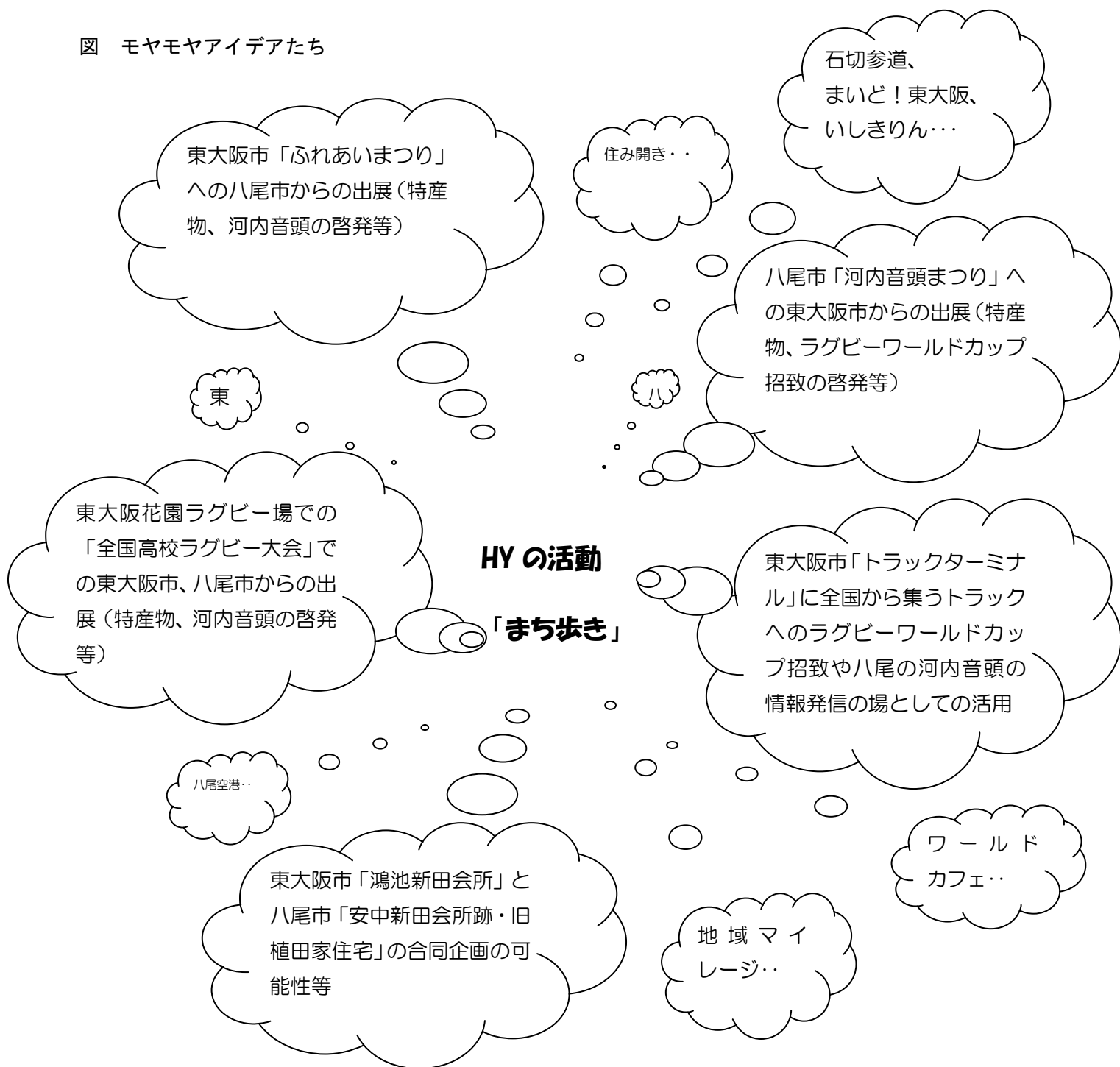
また、たくさんの地域の情報に触れる機会が多い自治体職員が、市民同士をつなげる触媒の役割を担いながら、市民の心豊かな暮らしに寄与するために、汗をかき、知恵を絞る必要があります。

今回の本研究会で取り上げた「まち歩き」という、“まち”へのアプローチは、東大阪市、八尾市の職員が

一緒になって、市民のそこでの日々の暮らしぶりを地域に根ざした着地型観光的に体験しながら、“まち”をオモシロがる手法（ツール）であることが再認識できました。今後は、「まち歩き」での小さな“気づき”の積み上げを、顔の見えるほど良い距離感で、多様な人たちが参加することができる 地域での具体の“まちづくり”の取り組みにつなげていきたいと考えています。

最後に、今回の本研究会に何らかの形で巻き込まれた人たちが、引き続き本研究会に参加し、新たな人へ積極的に「オモロイでえ〜」と声をかけながら、活動の輪（和）を広げていってもらうことを大いに期待しています。「ほんま、頼んマッセ！」

図 モヤモヤアイデアたち



規 約

東大阪・八尾広域研究会設置規約

（目的）

第1条

本研究会では、東大阪市・八尾市の近隣自治体の職員が、その土地固有の歴史や文化をふまえつつ、フィールドワーク（まち歩き）や意見交換、ゲストを招いての議論等を行うことによって、互いの職員が刺激しあい、外からの多様な視点を持って、新しい地域の可能性を発見することを目的とします。

（研究内容）

第2条

本研究会では、次の研究内容を行います。

- （1） 近隣自治体との相互確認作業による新・地域発見に関する研究
- （2） 東大阪市・八尾市におけるフィールドワーク
- （3） 先進地域におけるフィールドワーク
- （4） その他、上記研究内容に関連する研究

（代表・副代表）

第3条

本研究会には代表者を置く。また、東大阪市・八尾市から各1名を副代表者とする。

（その他）

第4条

この規約に定めるもののほか、必要な事項は本研究会で協議の上、別に定める。

東大阪・八尾広域研究会名簿

オオハラ アキコ
大原 晶子

フクイ ミホ
福井 美帆

ハヤカワ ヒロヤ
早川 裕也

モリ カツミ
森 克己

フジタ チホ
藤田 千帆

タカタニ ススム
高谷 享

ニシムラ ナオコ
西村 直子

キクチ タケオ
菊地 健夫

フクカワ ユウキ
福川 雄貴

ナカヤマ リエ
中山 理恵

ミヤギ ヒトシ
宮城 仁

モリモト エツジ
森本 悦次

ホリウチ シン
堀内 真

ウエダ リツコ
植田 律子

フカエ ミキ
深江 美妃

コウツキ サトコ
上月 達子

ミヤタ ジュン
宮田 潤

ウチノ カズヤ
内野 和也

オオニシ ヨウコ
大西 洋子

ササイ チカ
笹井 千佳

アイハラ タカシ
相原 貴史

アサダ ヨシテル
朝田 良輝

ヨシカワ キヨ
吉川 貴代

アミナカ タカユキ
網中 孝幸

ツエタニ エリ
崩谷 恵理

イマツ ヒロアキ
今津 博明

(順不同)

Special Thanks

近畿大学理工学部社会環境工学科 久研究室 福田惇一氏 中島直子氏、武庫川女子大学 水野優子氏、東大阪観光協会 大西由起子氏、NPO 法人「HICALI」のスタッフ達をはじめ、「まち歩き」等にご参加いただいた（巻き込まれた）方、また、今回、広域での研究の機会を与えてくれたマッセ OSAKA 他、今回ご紹介できなかった、たくさんのご支援、ご協力いただいた方々に感謝いたします。

今後とも引き続きよろしくお願いします。



HYの主な活動状況関連一覧

開催日	主催	タイトル	場所
H21.8.23	「鳴く虫と郷町」実行委員会 伊丹市	伊丹映像ワークショップ	伊丹市
H21.9.19	東大阪市まちづくり支援課	第6回まちづくり探検隊	東大阪市鴻池周辺
H21.9.25	東大阪・八尾広域研究会	ワークショップ“東大阪・八尾”	東大阪市立市民会館
H21.10.30	東大阪市まちづくり支援課	まちづくり講座第1回 講師：近畿大学・久教授	東大阪市役所
H21.12.12	東大阪・八尾広域研究会	HYまち歩き《東大阪編》	東大阪市西南部
H22.2.7	東大阪観光協会	枚岡・石切まち歩きイベント	東大阪市枚岡・石切
H22.2.20	東大阪・八尾広域研究会	HYまち歩き《八尾編》	八尾市植松周辺
H22.2.20	東大阪市リージョンセンター 企画運営委員会連絡会	まちづくり・委員研修会 講師：茶谷幸治氏	東大阪市役所
H22.3.12	東大阪・八尾広域研究会	HY講座 “視座について” 講師：近畿大学・岡田准教授	八尾市役所
H22.4.29	東大阪観光協会	布施まち歩きイベント	東大阪市布施周辺
H22.4.29	東大阪・八尾広域研究会	常光寺大般若会＋久宝寺まち歩き	八尾市本町～久宝寺
H22.5.9	東大阪・八尾広域研究会	HYまち歩き《ふれあいまつり編》	花園中央公園ほか
H22.5.29	東大阪観光協会	帝キネ撮影所跡まち歩き	東大阪市永和・菱屋西
H22.6.6	東大阪・八尾広域研究会	尼崎運河クルーズ＋商店街まち歩き	尼崎市
H22.8.24	東大阪・八尾広域研究会	常光寺地藏盆踊り＋プチまち歩き	八尾市常光寺周辺
H22.11.21	東大阪・八尾広域研究会	HYまち歩き《市境編》	東大阪・八尾市境周辺

参考文献

- ・ きしわだ都市政策研究所「岸和田ちやりんこ隊～価値の気づきと視座の共有・伝播をめざして～」
都市政策きしわだ vol.11、2005
- ・ 三浦展「ファスト風土化する日本」洋泉社新書、2004
- ・ 鳴海 邦碩・榊原 和彦・田端 修「都市デザインの手法」学芸出版社、2002
- ・ 岡田昌彰「テクノスケープ 同化と異化の景観論」鹿島出版会、2003
- ・ 博報堂生活総合研究所「タウン・ウォッチング 時代の「空気」を街から読む」PHP 文庫、1990
- ・ 植松のまちづくりを考える会「のんびり 植松 ぶらっと まっぷ」、2009
- ・ TEKU・TEKU「まち歩きガイド東京+」学芸出版社、2008
- ・ 愛媛大学地域創成研究センター＋松山市市民部市民参画まちづくり課
「まちづくり教本 みんなでやってみよう 地域コミュニティづくりのすすめ」、2006
- ・ 茶谷幸治「まち歩きが観光を変える 長崎さるく博プロデューサー・ノート」学芸出版社、2008
- ・ 茶谷幸治「成功する『まち歩き観光』」経済観光新聞連載、2008年4月～6月
- ・ NPO 法人まちづくり学校「マチダス2 まち育てサポート読本」
財団法人ニューにいがた振興機構・NPO 法人まちづくり学校、2004

HY ★ LET'S GO !
まち歩き